

長野県松本市

IDEGAWAMINAMI

出川南遺跡XII

—— 緊急発掘調査報告書 ——

2002.3

松本市教育委員会

長野県松本市

IDEGAWAMINAMI

出川南遺跡XII

—— 緊急発掘調査報告書 ——

2002.3

松本市教育委員会

序

出川南遺跡は松本市の南部、芳野地区一帯に所在する遺跡です。本遺跡は以前から埋蔵文化財の包蔵地として知られており、昭和61年に初めての発掘調査が行われて以来、今回で12箇所目の調査となります。

このたび当地に県営住宅南松本団地の建替え工事が計画されたため、松本市が長野県から委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は市教育委員会によって、平成13年10月から平成14年1月にかけて行われました。作業は天候にもめぐまれ、関係者の皆様の御尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、古墳時代から平安時代にかけての生活跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと思われまます。

しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことです。発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大な御理解と御協力をいただいた長野県住宅部の皆様、県営住宅南松本団地をはじめ地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

松本市教育委員会 教育長 竹 淵 公 章

例 言

- 1 本書は、平成13年10月15日～平成14年1月16日に実施された松本市芳野に所在する出川南遺跡第12次調査の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は長野県による県営住宅南松本団地建替え事業に伴う緊急発掘調査であり、長野県より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、I：事務局、V-1：菊池直哉・田多井用章、その他を田多井用章が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。

遺物洗浄：百瀬二三子

遺物保存処理・復原：五十嵐周子、内澤紀代子

遺構図整理：石合英子、田多井用章

遺物実測：菊池直哉、竹内直美、竹平悦子、田多井用章、洞沢文江、松尾明恵

トレース・版組：田多井用章、洞沢文江

写真撮影：菊池直哉、田多井用章（遺構写真）

総括・編集：田多井用章

- 5 本書で使用した遺構の略称は以下の通りである。

竪穴住居址→住、土坑→土、ピット→P

- 6 図中で用いた方位記号は全て磁北を用いている。

- 7 遺構・遺物の記述中で用いた時期区分や遺物の分類、用語等は、古墳時代後期は文献1に、古代は文献2にそれぞれ拠った。また、石器の取り扱い等については文献3を参考とした。

文献1 松本市教育委員会 1994 『松本市出川南遺跡IV・平田里古墳群』松本市教育委員会

文献2 小平和夫 1990 「第5節 古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内1－総論編』(財)長野県埋蔵文化財センター

文献3 太田圭郁 2000 「石器」『松本市平瀬遺跡II』松本市教育委員会

- 8 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に収蔵されている。

目 次

序

例 言

目 次

I 調査の経緯

- 1. 調査に至る経過 1
- 2. 調査体制 1

II 遺跡の位置と環境

- 1. 地理的環境 2
- 2. 歴史的環境 2
- 3. 過去の調査の概要 3

III 調査の概要 5

IV 遺構

- 1. 概要 10
- 2. 竪穴住居址 10
- 3. 溝址 12
- 4. 土坑・ピット 12
- 5. 凹地状の地形 12

V 遺物

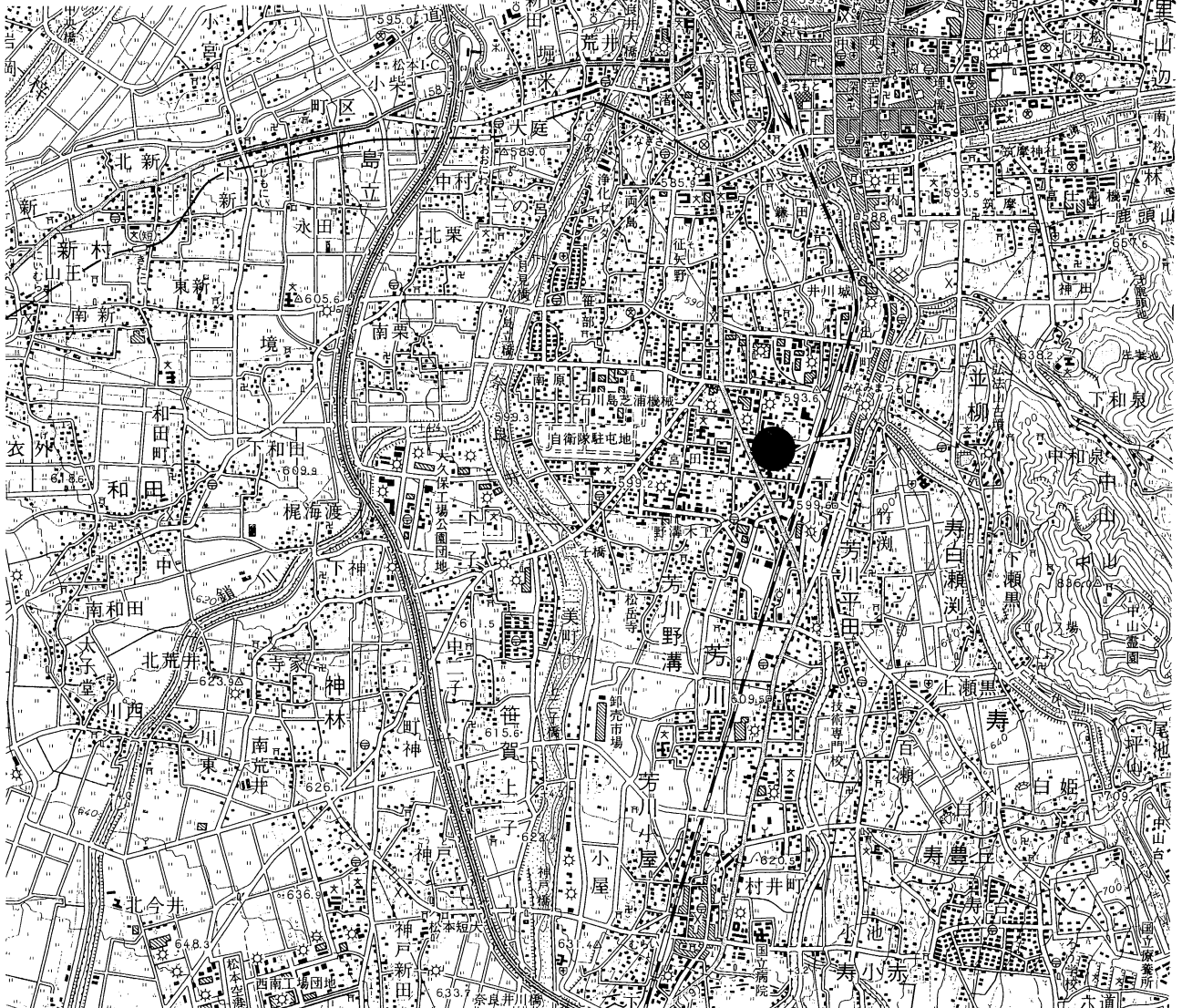
- 1. 土器・陶器
 - (1) 古墳時代の土器・陶器 20
 - (2) 平安時代の土器・陶器 20
- 2. 金属器 22

VI 調査のまとめ 32

写真図版

報告書抄録

長野県



第1図 調査地点の位置 (1 : 50000)

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過

出川南遺跡は、松本市街地の南部、芳野地区に位置する遺跡である。昭和61年に第1次発掘調査が行われて以来、これまで11次にわたる調査が実施されている。平成10年からは長野県住宅部による県営住宅南松本団地建替え事業が実施され、建設工事に先立って発掘調査を実施している(第8次調査)。今回の調査は、この県営住宅建て替え工事に伴うもので、事業地が第8次発掘調査地点の南側に隣接しており、埋蔵文化財を包蔵していることが予想されたため、事業者である長野県住宅部と埋蔵文化財の保護について協議を行い、発掘調査を実施して埋蔵文化財の記録保存を図ることとなった。発掘調査及びこれに係る事務処理については松本市教育委員会が実施することとし、長野県と松本市の間に平成13年8月29日付けで発掘調査業務の委託契約が締結された。現地での発掘調査は平成13年10月15日～平成14年1月16日まで行われた。発掘調査終了後は、引き続き考古博物館において、整理作業および本報告書の作成を行った。

2. 調査体制

調査団長 竹淵公章（松本市教育長）

調査副団長 大澤一男（松本市教育部長）

調査担当者 田多井用章（文化課主事）、菊池直哉（同嘱託）

調査員 太田守夫、松尾明恵、宮嶋洋一、望月映、森義直

協力者 浅輪敬二、荒井留美子、荒木稔、飯島由次、石合英子、五十嵐周子、石井脩二、井上直人、今村克、白井秀明、内澤紀代子、大月八十喜、神田栄次、北野智之、小松正子、下条ちか子、鈴木幸子、鷲見昇司、高橋昭雄、高橋登喜男、竹平悦子、寺嶋実、中上昇一、中村安雄、中山自子、林和子、福島勝、藤本利子、布野和嘉夫、布山洋、洞沢文江、丸山恵子、道浦久美子、村山牧枝、甕國成、百瀬二三子、百瀬二三子、百瀬義友、八板千佳、横山清、米山禎興

事務局 松本市教育委員会教育部文化課

有賀一誠（課長）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、久保田剛（同）、渡邊陽子（嘱託）、塚原祐一（同）

II 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

今回の調査地点は松本市芳野10番地にあり、現在は県営住宅南松本団地の敷地内となっている。この周辺一帯は第2次世界大戦前後までは畑地として利用された。昭和30年代には県営住宅及びこれに隣接する市営住宅が建設され、宅地化された。現在は商業地及び宅地として市街化の著しい地区である。

調査地点の標高は597m前後で、標高は調査区南西端で597.6m、北端で597.2m、南東端の標高は597.1mである。近年の開発で現地形は失われているが、全体的には北西から南東方向に若干下がる地形といえる。東には田川、西には奈良井川が位置しており、現河床までの距離は田川が650m、奈良井川が1600mである。地形的には奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地が接する沖積扇状地性堆積の末端に位置している。

調査地点の基本的な土層の堆積状況は第6図の通りである。第VI層とした礫層は今回の調査地点から第2次調査地点に渡って分布しているようである。この礫層は、硬砂岩が主体を占め、粘板岩及びチャートがこれに混じる。このような構成から、奈良井川系の堆積によるものと考えられる。VI層上面の標高は、B区南西のN27W120付近で596.32m、B区東側のN12W75付近で596.10m、A区東側のS3W15付近で595.87m、B区西側中ほどのN39W117付近で596.20m、B区北端のN54W111で596.10mである。現地形同様、南西側がもっとも高く、東及び南に行くにつれて低くなっている。VI層の上に乗る粘質土及びシルト質土(III～V層)はこうした基盤土から雨水・小流によって洗い出され堆積したものである。調査区内では、所々でIII～V層を切る小洪水の痕跡が観察できた。

今回の調査地点の西側では基本土層の堆積が異なる。攪乱が著しく厳密にはわからないが、W105から西側はII層が欠落し、I層直下からVI層上面まで暗褐～暗灰褐色砂質土が堆積する。また、VI層が緩やかに落ち込む箇所が確認され、凹地状の地形を呈していたものと考えられる。こうした凹地状の部分には土器・陶器や礫群などの遺物が人為的に投棄された状況が観察されている。

調査地点の西端には比較的規模の大きな洪水によるものと思われる礫層が確認できた。大部分が攪乱を受け、平面的な広がりをきちんと確認できなかったが、基本的には南西方向から北東方向へ流れたものと思われる。この礫層は極めてふるい分けが悪く、また灰白色を呈し、攪乱土の直下から分布しているなど、かなり新しい時期の奈良井川の洪水によるものと考えられ、少なくとも古代のものとは考えがたい。

2. 歴史的環境

出川南遺跡周辺の遺跡分布を第2図に示した。これらの遺跡は、田川右岸の遺跡群、田川と奈良井川に挟まれた地域の遺跡群、奈良井川左岸の遺跡群の3群に大きく分けることができる。

田川右岸の遺跡群(22～26)は、中世以前は基本的には洪水を受けない安定した場所に立地する。ただ、近世以降東側の牛伏川がしばしば氾濫しており、現在把握できる遺跡の分布はこの氾濫による破壊を免れたもののみである。縄文時代には、山よりの小池遺跡で中期の大規模な集落が確認されているほか、百瀬遺跡で縄文土器と若干の土坑が確認されている。その後弥生時代中期以降、弥生土器の百瀬式の標識遺跡として著名な百瀬遺跡のほか、竹淵遺跡・竹淵南原遺跡で規模の大きい集落が営まれる。この後中世に至るまで断続的ながらこの一帯に集落が形成されていることがこれまでの発掘調査により明らかにされており、百瀬遺跡・向原遺跡・竹淵遺跡・竹淵南原遺跡で弥生時代から中世にわたる集落址の調査が行われている。

田川と奈良井川に挟まれた一帯の遺跡群(6～21)は両河川の扇状地末端に位置しており、沖積地上に形

成された遺跡である。出川南遺跡もこの一群に含まれる。この遺跡群の初源は弥生時代中期後半にさかのぼり、出川西・平田北両遺跡で該期の遺物・遺構が確認されている。この後若干の断絶を挟み、また地点を変えながらも、この一帯に古墳時代から平安時代にかけて集落が営まれている。古墳時代後期には出川南遺跡で、奈良時代から平安時代前期にかけては出川南遺跡及び平田北遺跡で、規模の大きな集落が営まれたことがこれまでの発掘調査により明らかになっている。10世紀代には、松本平の他の地域同様、集落ははっきりと確認することができない。平安時代後期から中世にかけては平田本郷・小原・吉田川西遺跡など、南側の地域で大規模な集落が確認されている。

奈良井川西岸の遺跡群（27～30）は、奈良井川の河岸段丘上に位置する。初源は縄文時代にさかのぼるが、いずれも散発的で、その後に継続するものではない。この一帯に本格的に集落が営まれるようになるのは7世紀後半からで、下神・南栗・北栗遺跡などで奈良時代～平安時代前期にかけての大規模な集落が急速に営まれるようになる。この一帯は河岸段丘上に位置することから、利水の悪い地域で、開発には水路の整備が不可欠であり、計画的で大規模な開発によりこうした大規模な集落が成立したものと思われる。10世紀後半には、これら集落は急速に衰えるが、11世紀以降中世にかけて再度開発が行われ、集落が立地するようになる。

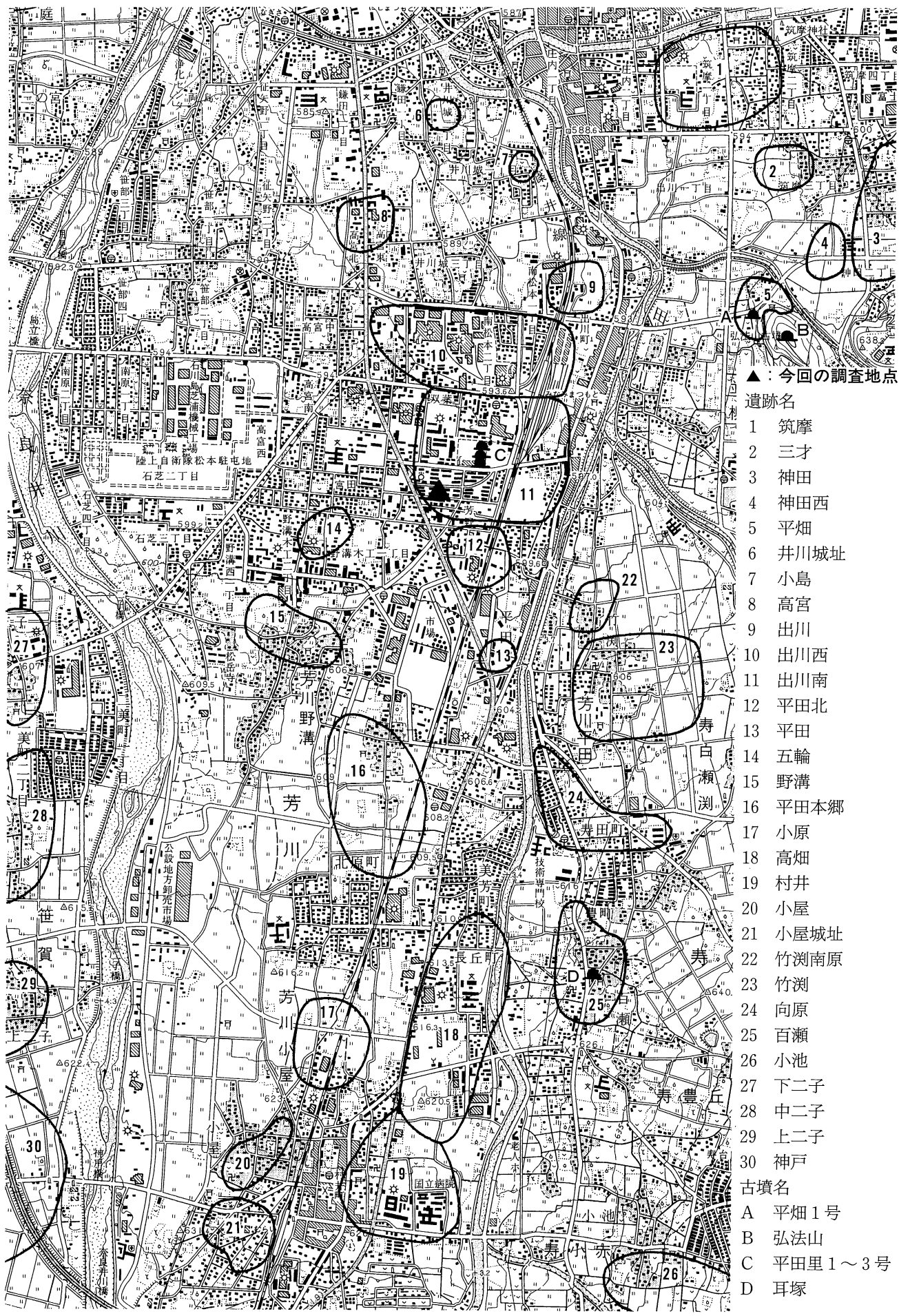
3. 過去の調査の概要

出川南遺跡ではこれまで開発行為に先立つ発掘調査が11次にわたり実施されている。各調査地点の位置を第3・4図に示した。調査成果の概要は第3表の通りである。これまでの調査地点は遺跡の東側・南側・北側の3群に大きく分けることができる。

東側の調査地点として第1・6・11次調査地点がある。地質学的な所見によれば、この一帯は田川の形成した基盤上に乗っているようである。弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代前期・後期の集落が確認されている。いずれの調査地点も遺構面が2枚あり、上が古墳時代後期以降、下が弥生時代後期～古墳時代後期である。その他の調査地点では基本的に遺構面は1枚であり、田川が形成した地形上に乗っていることと合わせ、遺跡の形成過程が西側とは若干異なるようである。

南側の調査地点は今回の調査地点を含む。第4次調査地点内では、中期古墳である平田里1～3号古墳を調査した。古墳時代後期から平安時代前期が中心となり、比較的規模の大きい集落が確認されている。この時期の間は地点を若干変えながらも継続して集落が営まれたようで、特に古墳時代後期の集落は第4次調査地点でその様相がかなり明らかになった。近年の調査により、奈良時代から平安時代前期の集落が存在すること、またその内容もかなり把握することができるようになった。第4次調査地点からその南側にかけて古墳時代後期の集落が見られ、その後奈良時代の集落が5・7・8・12次調査地点にかけて広がる。出川南遺跡の南にある平田北遺跡でもこの時期の集落が確認されており、密接な関係を持っていたものと思われる。平安時代前期の集落は5・7次調査地点および8・12次調査地点の東側にかけて分布する。確認できる範囲では奈良時代の集落より規模が小さくなるように見える。10世紀以降の遺構はこれまでのところ明確には確認できていない。

北側の調査地点として第9次調査地点があるが、ここでは古墳時代前期及び後期の集落を確認した。出川南遺跡の北側に位置する出川西遺跡では弥生時代中期後半から後期の集落が確認されていること、またJR篠ノ井線の南松本駅周辺では古墳時代前期の遺物の出土が伝えられており、出川南遺跡の北側から出川西遺跡にかけての一帯に弥生時代後期から古墳時代前期の集落が展開していたことが想像できる。本遺跡東側に位置する前期古墳の弘法山古墳との関わりが注目される。



▲：今回の調査地点

遺跡名

- 1 筑摩
 - 2 三才
 - 3 神田
 - 4 神田西
 - 5 平畑
 - 6 井川城址
 - 7 小島
 - 8 高宮
 - 9 出川
 - 10 出川西
 - 11 出川南
 - 12 平田北
 - 13 平田
 - 14 五輪
 - 15 野溝
 - 16 平田本郷
 - 17 小原
 - 18 高畑
 - 19 村井
 - 20 小屋
 - 21 小屋城址
 - 22 竹瀨南原
 - 23 竹瀨
 - 24 向原
 - 25 百瀨
 - 26 小池
 - 27 下二子
 - 28 中二子
 - 29 上二子
 - 30 神戸
- 古墳名
- A 平畑1号
 - B 弘法山
 - C 平田里1～3号
 - D 耳塚

第2図 周辺の遺跡 (1 : 25000)

III 調査の概要

今回の調査地点は平成11年度に実施した第8次調査地点の南側に隣接していたため、開発事業者である長野県住宅部との保護協議結果をふまえ、事業地全体を対象範囲とした。事業地は昭和30年代に県営住宅南松本団地・市営芳野町団地が建設されていたところであったため、建物基礎や配管等の攪乱がかなり広く及んでおり、結果的に調査が可能であったのは事業地の一部、面積ではおよそ4割程度であった。

調査に際しては重機により遺構検出面までの表土除去を行った後、人力により遺構検出・掘削作業を行った。建物基礎・配管等の攪乱がかなり及んでおり、概して遺構の残存状況は悪かった。掘削の結果、当初攪乱として把握していた部分で、攪乱の下に遺構覆土が残存している所もあり、この部分についても攪乱を除去して遺構の掘削を行った。また、第7・8次調査地点での所見から古墳時代後期から平安時代前期の遺構面の下層から古墳時代中期初頭の遺物が出土する可能性があったため、検出面を2枚設定し、第1検出面の調査終了後にさらに重機により掘削を行い、第2検出面の調査を行った。調査終了後は重機による埋め戻しを行った。遺構などの測量記録は、磁北方向に沿って任意の3m方眼を設定して行った。設定した方眼は国土座標系上の位置を出した。

調査地点の基本的な土層構成は第6図の通りである。遺構はIII層中から掘り込まれていた可能性が高いが、土層中に鉄分を多量に含み、検出が困難であったため、検出面はIV層上面から5cm程度下げた付近とした。第2検出面はV層中とした。遺構覆土は地山より若干黒みが強いが色調が近似しており、検出時にはプランはそれほど明確に把握できなかった。なお、第2検出面からは予想していた古墳時代中期初頭の遺物・遺構は確認されず、第1検出面で把握できなかった奈良・平安時代の遺構の掘り残しを調査する結果となった。このため、本書では2つの検出面で調査した遺構を区別せずに取り扱ってある。

調査により、奈良時代から平安時代前期の住居址を始めとする遺構が確認され、該期の遺物も出土した。遺物のうち石器については、広義の石器（例言7中文献3）は回収せず、狭義の石器のみを回収の対象とする方針で調査を行ったが、結果的に狭義の石器は出土しなかった。住居址は大半が奈良時代に帰属し、古墳時代後期と平安時代前期（9世紀代）のものも確認できた。調査地区の西側は住居址など明確な遺構の分布が見られず、地山も砂質土であった。掘削をしたところ、凹地状の地形が確認され、全体に散発的ながらも遺物の分布が見られたほか、人為的に投棄されたと思われる礫や土器などの遺物がややまとまって出土する箇所も確認することができた。

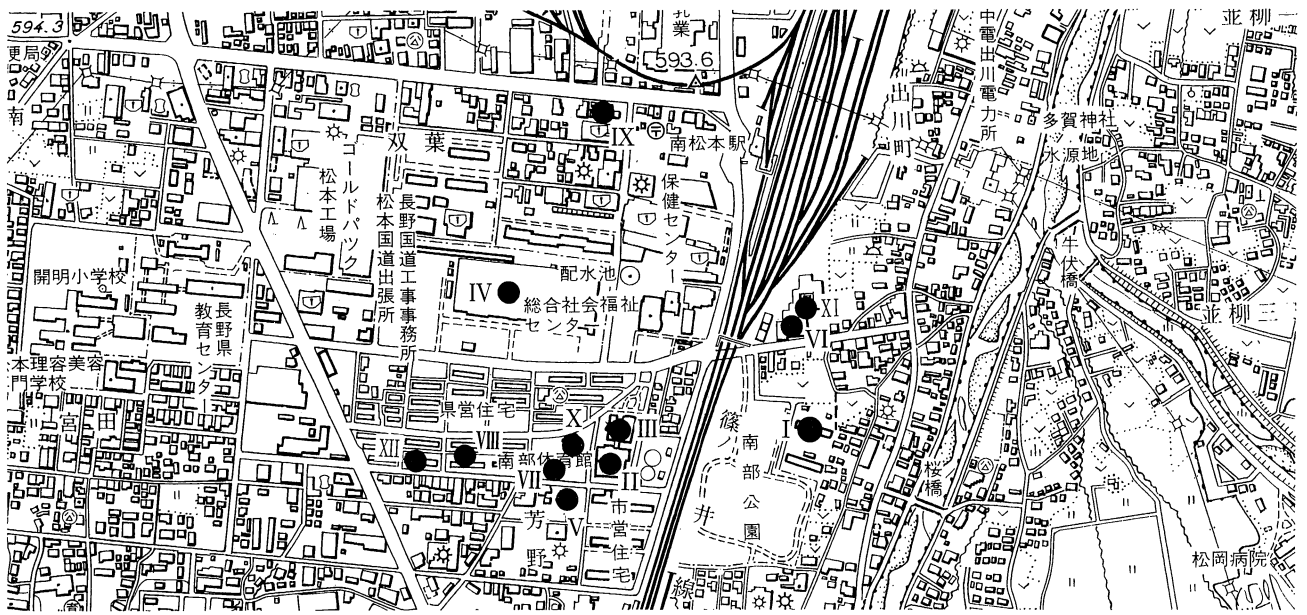
調査の実施期間・面積・検出遺構・出土遺物の概要は下記のとおりである。

調査期間 平成13年10月15日～平成14年1月16日

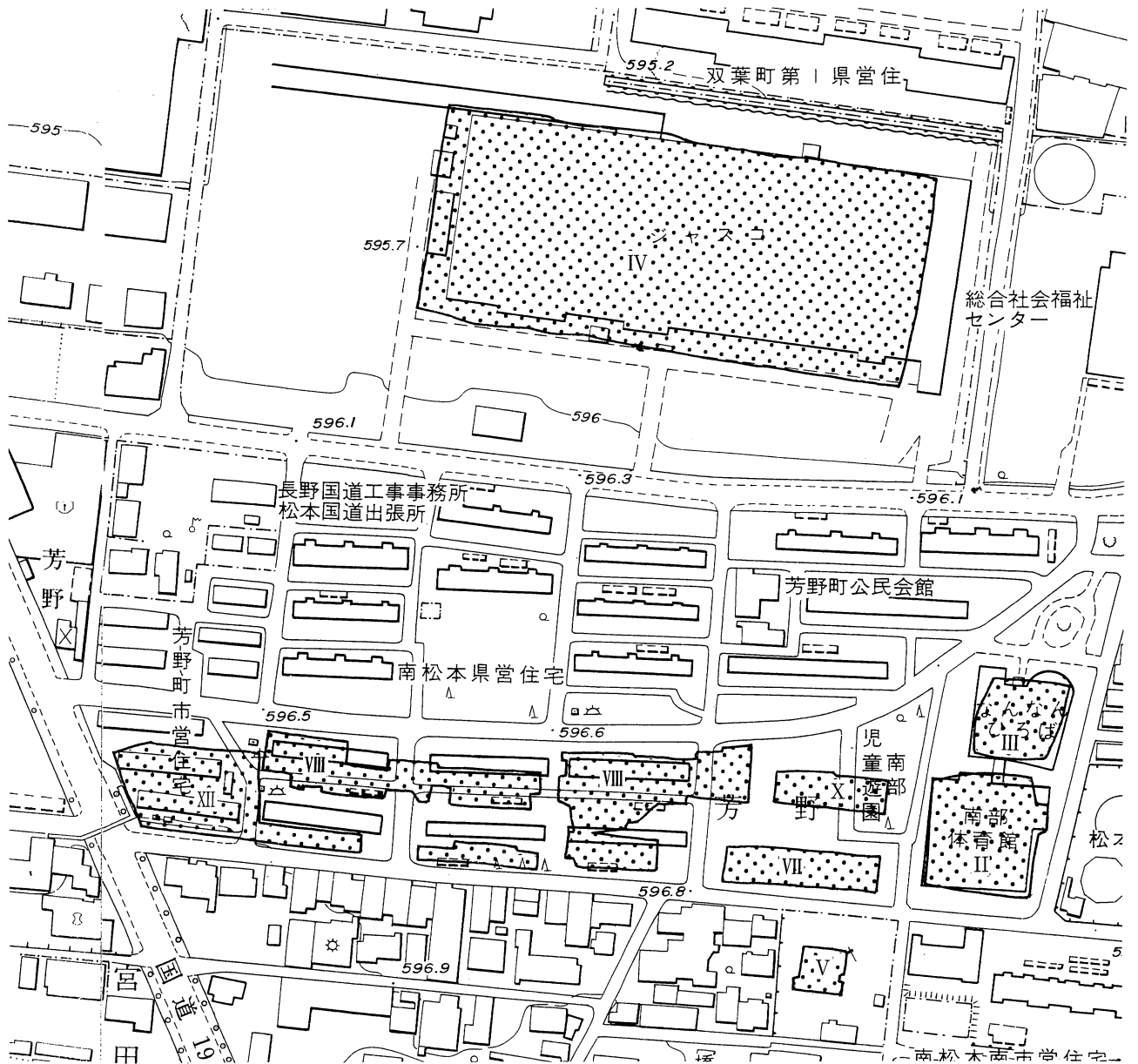
調査面積 2197m²

検出遺構	竪穴住居址	13棟 (318～338 うち8棟を欠番)
	溝	1条
	土坑	34基 (1～49 うち15基を欠番)
	ピット	70基 (1～109 うち39基を欠番)

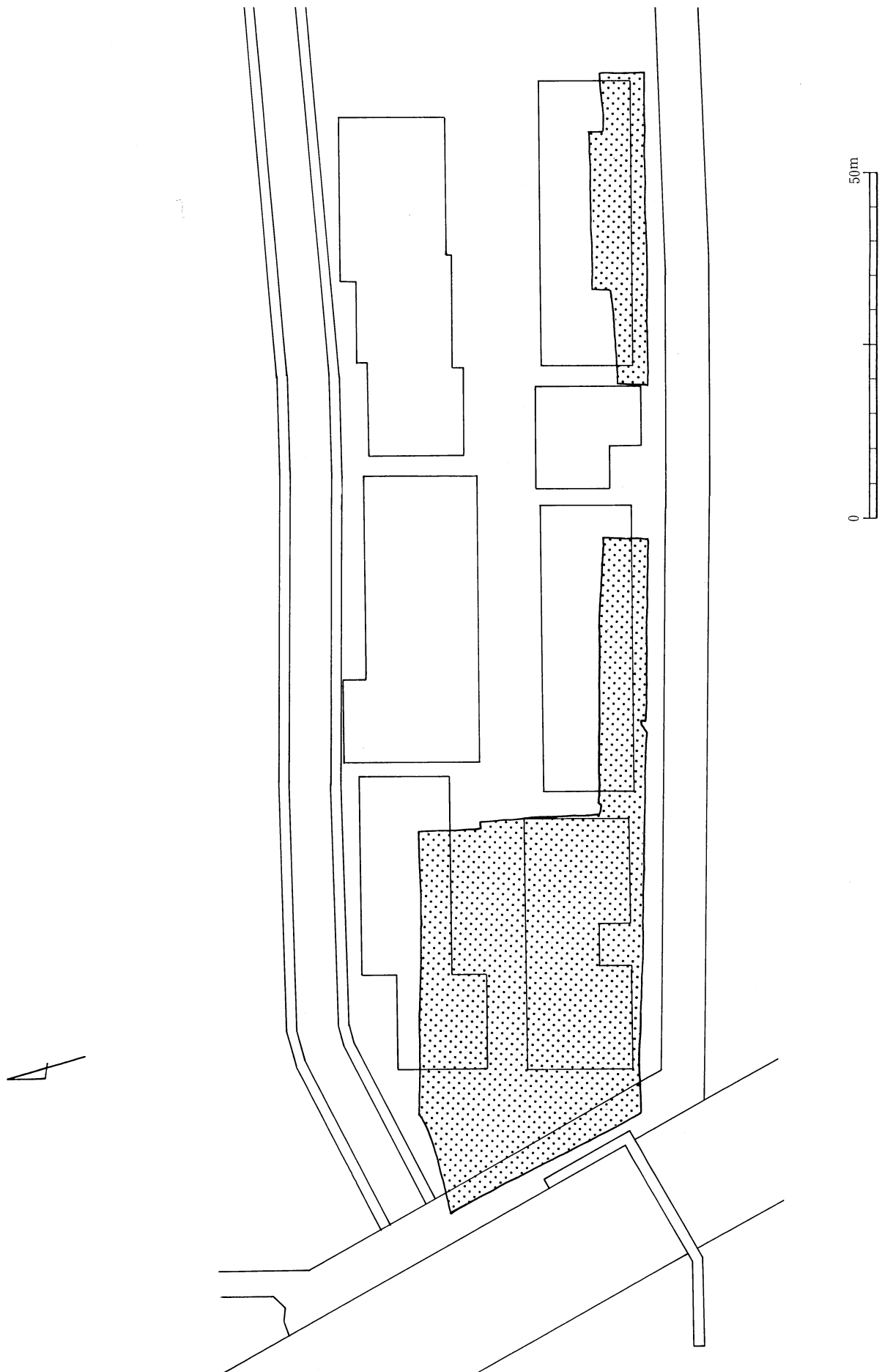
出土遺物 土器・陶器（土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器）・鉄器



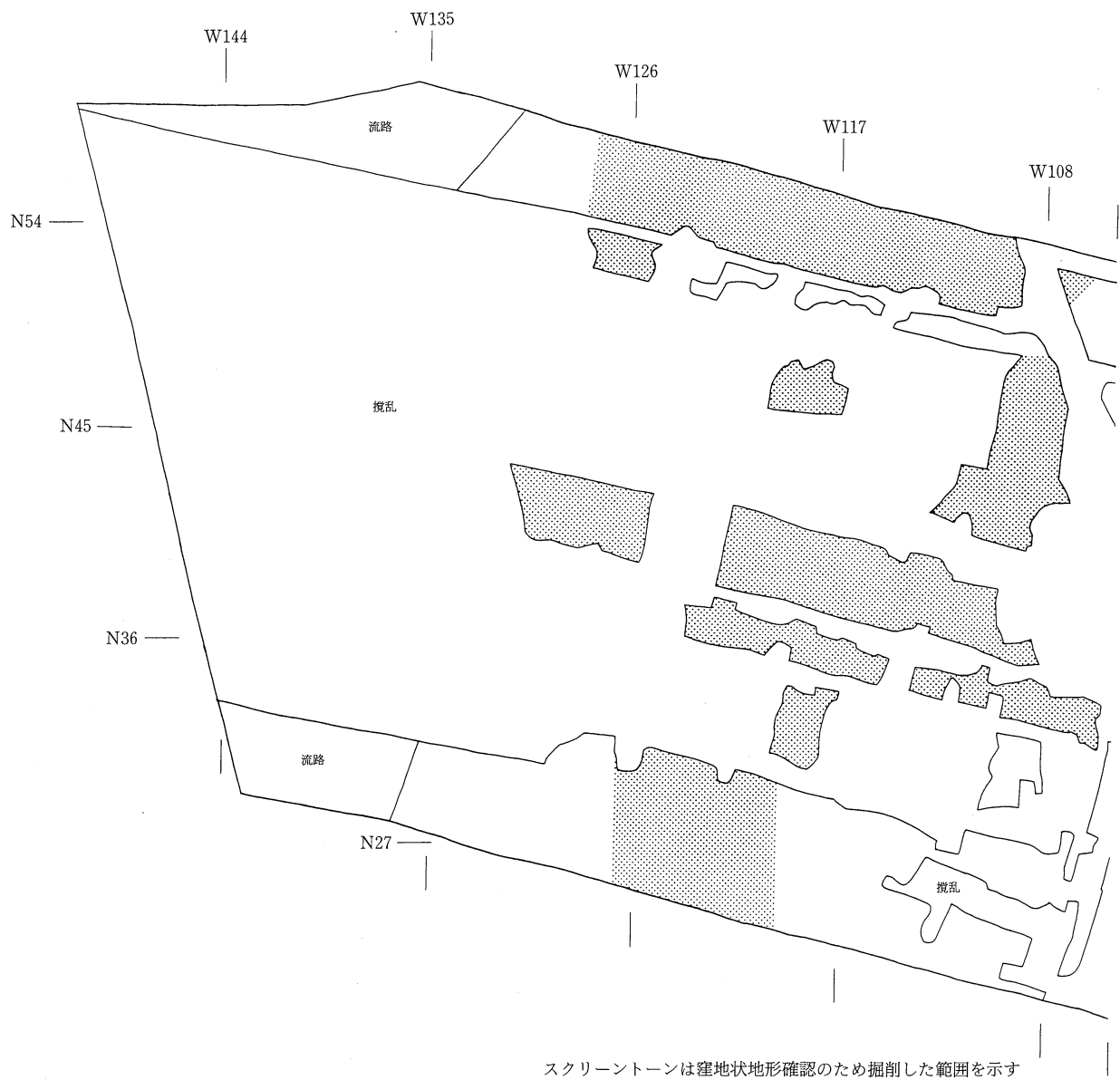
第3図 過去の調査地点 (1 : 10000)



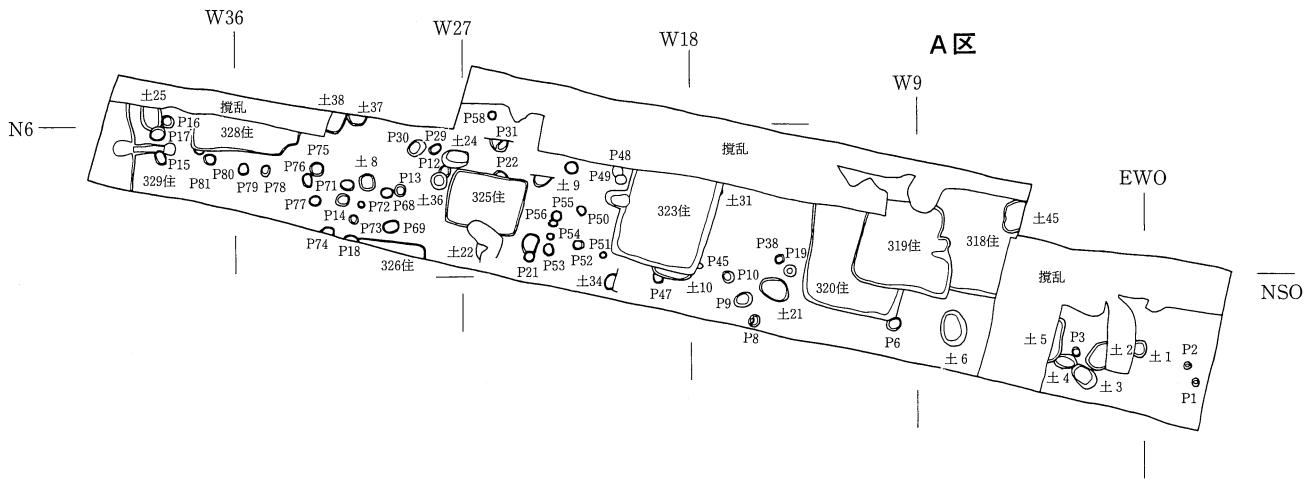
第4図 出川南遺跡西側の調査地点 (1 : 2500)



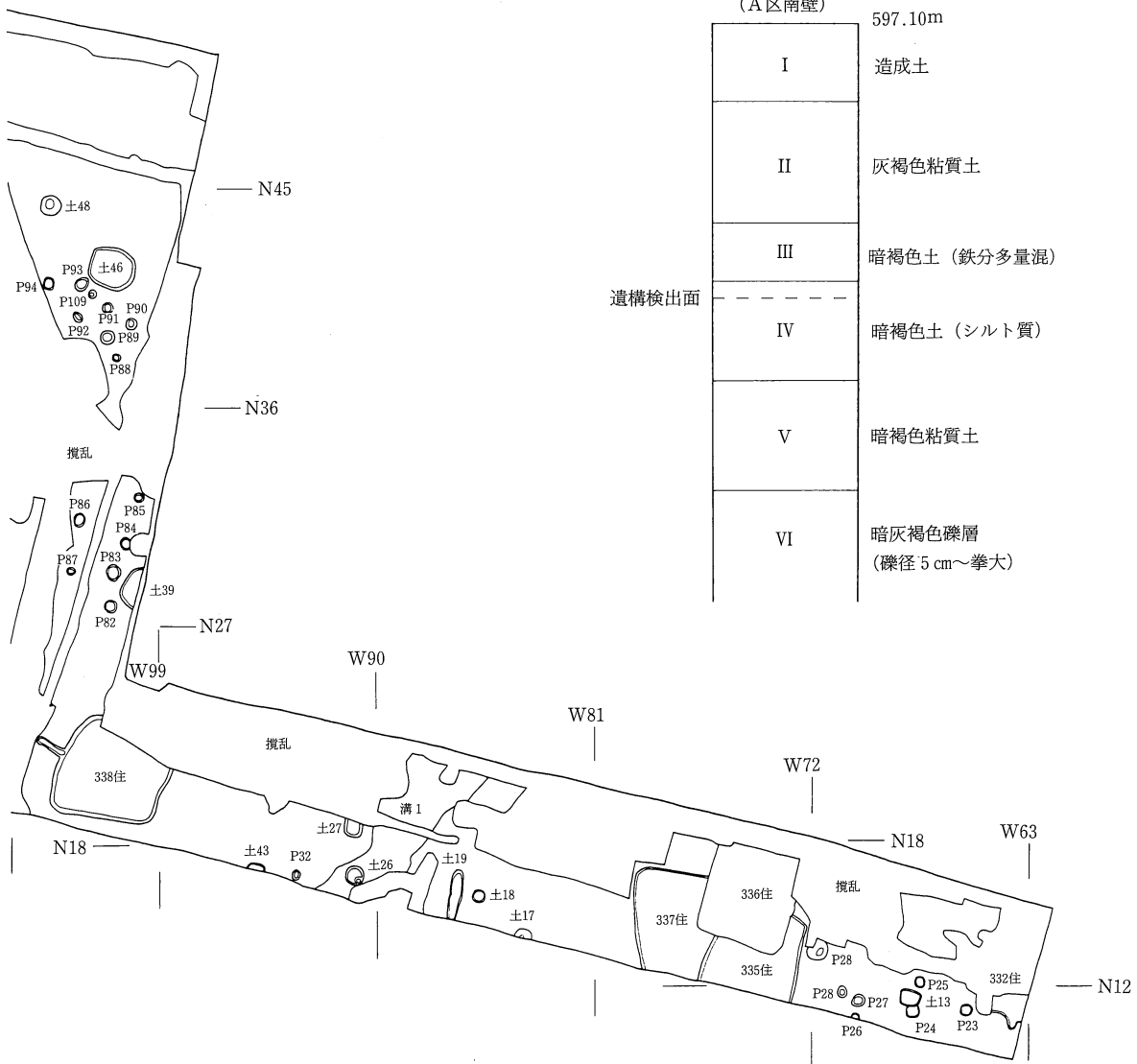
第 5 図 調査範囲



第6図 遺構配置図・基本土層図



B区



基本土層

(A区南壁)

597.10m

I	造成土
II	灰褐色粘質土
III	暗褐色土 (鉄分多量混)
IV	暗褐色土 (シルト質)
V	暗褐色粘質土
VI	暗灰褐色礫層 (礫径 5 cm~拳大)

IV 遺構

1. 概要

今回の調査で確認できたのは竪穴住居址13棟、溝1条、土坑34基、ピット70基である。また、B区西側では凹地状の地形を確認し、人為的に投棄されたと思われる礫群や遺物が出土している。この凹地上の地形の見られる西側の一帯は明確な遺構が分布せず、遺跡の西端を確認することができたといっていよう。

遺構番号は竪穴住居址については第11次調査までの番号の続き(318住～)を振り、その他の遺構は1番から振った。番号は、遺構検出時には竪穴住居址は318～357住まで、土坑は1～49、ピットは1～109までをそれぞれ振ったが、掘削の結果遺構ではないことが判明したものがあり、竪穴住居址は整理作業に支障のない範囲で番号の振り替えを行い、その他については欠番扱いとした。土坑・ピットについては番号の振り替えは行っていない。最終的に確認できたのは、竪穴住居址13棟、溝1条、土坑34基、ピット70基である。年代的には古墳時代後期～平安時代前期にわたるが、奈良時代のものが多い。

2. 竪穴住居址

第318号住居址

遺構の大半を319住及び攪乱に切られ、全容は不明。地山の暗褐色土を掘り込み、壁は斜めに立ち上がる。床は地山の暗褐色粘質土で、貼床は確認されなかった。覆土は2層からなる。床面でピットを9基確認したが、柱穴は不明。遺物は覆土中及び床面付近から出土している。出土遺物から3～4期に帰属する。

第319号住居址

遺構北側は、上半を攪乱によりかなり削平されていた。地山の暗褐色土及び318・320住覆土を掘り込み、壁は垂直に近く立ち上がる。覆土は3層からなる。床は淡褐色粘質土による堅緻な貼床がされており、床面のほぼ全体で確認することができた。カマドは東壁ほぼ中央に確認されたが、上半は攪乱されており、袖の基底部と火床を確認したにとどまった。袖は淡褐色の粘土で構築されており、硬く締まっていた。袖石は確認できなかった。火床は顕著に赤化していた。床面でピットを4基確認したが柱穴は不明。遺物はカマド周辺の床面及び覆土中から出土している。出土遺物から5期に帰属する。

第320号住居址

東半を319住に切られる。南半は床までの深さが30cm以上あり、残存状況は良好だが、北半は攪乱によりかなり削平されていた。地山の暗褐色土を掘り込み、壁は垂直に近く立ち上がる。覆土は5層からなる。床は淡褐色粘質土による堅緻な貼床が部分的に確認できたが、壁沿いははっきりとしなかった。床面でピットを5基確認したが、柱穴は不明。カマドは確認できなかった。遺物は床面付近を中心に出土している。出土遺物から3期に帰属する。

第323号住居址

北側を攪乱に切られる。地山の暗褐色粘質土を掘り込み、壁は斜めに立ち上がる。覆土は3層からなる。床は明褐色粘質土による堅緻な貼床で、全面で確認できた。床面でピットを10基確認したが、柱穴は不明。ピット1は覆土中に焼土・炭化物を多量に含み、ピット内から土器がまとまって出土した。カマドは西壁に設けられていた。廃絶時に破壊されたものか、袖は確認できず、煙道及び火床を確認するにとどまった。火床の赤化はそれほど顕著ではなく、カマド覆土に含まれる焼土の量も少なかった。カマド南側壁沿いには完形に近い土師器小型甕が置かれてあった。遺物は床面付近を中心に出土している。出土遺物から3期に帰属

する。

第325号住居址

南側を攪乱に切られる。地山の暗褐色土を掘り込み、壁は垂直に近く立ち上がる。覆土は4層からなる。床は地山の暗褐色粘質土で、貼床は確認されなかった。床面でピットを4基確認したが柱穴は不明。カマドは確認できなかった。遺物は覆土中より少量出土したのみ。帰属時期は古墳時代後期後半～2期の間としかわからない。

第326号住居址

大半が調査区外にかかり、全容は不明。地山の暗褐色土を掘り込み、壁は斜めに立ち上がる。覆土は4層からなる。床は地山の暗褐色粘質土で、貼床は確認されなかった。遺物は覆土中より出土している。出土遺物から2期に帰属する。

第328号住居址

上半を攪乱により削平されており、とくに南東隅付近は床までの深さが5cm程度で、この部分のプランは明瞭には確認できなかった。地山の暗褐色土を掘り込み、壁は斜めに立ち上がる。覆土は3層からなる。床は明褐色粘質土による貼床がほぼ全面で確認できた。床面でピットは確認できなかった。東壁には焼土の分布が確認でき、これがカマドであったと思われる。袖等は確認できなかった。遺物はカマドと思われる焼土範囲周辺の床面からまとまって出土している。出土遺物から5期に帰属する。

第329号住居址

北側を攪乱に切られ、南・西側は調査区外にかかり、全容は不明。地山の暗褐色土を掘り込み、壁は斜めに立ち上がる。覆土は3層からなるが、いずれも直径5cm以下の小礫を少～中量含んでおり、基本的に礫を含まない他の遺構の覆土とは異なる。貼床は確認されず、地山の小礫を多量に含む暗褐色土で床とした。床面でピットは確認できなかった。カマドは東壁に設けられ、発達した煙道が確認できた。火床及び奥壁の赤化は顕著ではない。袖は廃絶時に破壊されたものか、一部に袖石を残すのみであった。遺物はカマド周辺の床面からまとまって出土している。出土遺物から2期に帰属する。

第332号住居址

遺構の大半が攪乱を受けており、南側の一部を確認したにとどまった。地山の暗褐色土を掘り込み、壁は斜めに立ち上がる。南壁寄りにカマドが確認でき、火床と袖石の一部が残存していた。火床の赤化は顕著ではない。遺物は床面付近から少量出土している。出土遺物はわずかで、帰属時期は判然としない。

第335号住居址

335～337住は3軒の切合いであるが、検出時には335・337住2軒の切合いと判断し、床面まで掘削を行った。その後、検出時には攪乱部分と考えていた北側に、攪乱の下に遺構覆土が残存していることが判明し、この部分の攪乱を人力で除去した。これにより335住北東のコーナーが確認され、さらにカマドが確認できたため、もう1軒あることが判明、これを336住(掘削時は355住)とした。336住のプランは床面の状況等からプランを決定せざるを得ず、3軒各々のプランについては正確を期せなかった。

335住は337住を切り、336住に切られる。地山の暗褐色土を掘り込み、壁は斜めに立ち上がる。覆土は2層からなる。床は淡褐色粘質土による貼床が南半では確認できたが、北半は地山の小礫を多量に含む暗褐色土層で床とした。カマド及び床面のピットは確認できなかった。遺物は床面付近から出土しており、特に南東隅床面上からまとまって出土している。出土遺物から1～2期に帰属する。

第336号住居址

先述のように、掘削時にプランを把握できなかったため、プランを明確に把握することができなかった。カマドより北側の部分は攪乱の下にあり、覆土は10cm程度しか残存していない部分が大半であったうえ、上

面に敷設されていた下水管の影響で覆土が強くグライ化してしまっており、土色による遺構検出ができなかった。このため、遺構プランは、南半で貼床の範囲からプランを決定し、これを北半に延長したもので、想定プランの域を出ないものである。以上のような経緯のため、覆土・壁の状況は不明となってしまった。床は明褐色粘質土による貼床がほぼ全体に確認できた。西半の床面上には拳～人頭大の礫群が確認された。床面でピットを3基確認し、このうちピット1は覆土中に焼土が中量含まれていた。カマドは東壁に確認された。上半を攪乱され残存状況は悪いが、袖石の一部と火床を確認できた。火床上には完形の土師器小型甕が伏せられた状態で出土している。火床は顕著に赤化していた。遺物はカマド周辺の床面を中心に出土している。出土遺物から2期に帰属する。

第337号住居址

335・337住に切られる。地山の暗褐色土を掘り込み、壁は斜めに立ち上がる。覆土は2層からなる。床は淡褐色粘質土による貼床が南半で確認できたが、北半は地山の小礫を含む暗褐色土とした。床面でピットを1基確認した。北東部分の床面上には拳～人頭大の礫群の分布が確認できた。遺物は床面付近から少量出土している。出土遺物から1期に帰属する。

第338号住居址

今回の調査範囲ではもっとも西に位置する住居址である。北側は攪乱を受ける。地山の暗褐色土を掘り込み、壁は斜めに立ち上がる。覆土は2層からなり、径2cm程度の小礫を中量含む。床は貼床が確認されず、地山の小礫を多く含む暗褐色土とした。床面でピットを3基確認したが、柱穴は不明。カマドは西壁で確認され、長い煙道を持つ。袖は破壊されたためか確認できず、火床を確認するにとどまった。火床は顕著に赤化していた。遺物はカマド周辺の床面からまとまって出土している。出土遺物から古墳時代後期後半、出川南第3段階に帰属するものである。

3. 溝址

B区で1条を確認した。位置及び覆土の状況から第8次調査地点の溝1とつながるものであろう。覆土はチョコレート色に近い暗褐色土で、他の遺構の覆土とは色調が異なる。遺構検出時にはプランは明確に把握できず、第2検出面の段階で当初想定していたものより幅が広くなることが判明した。このため断面形状・覆土の堆積状況の詳細は把握できなかった。出土遺物はわずかで、古墳時代のものが出土した。

4. 土坑・ピット

遺構検出時に、直径がおよそ50cm以上の穴を土坑、それ以下のものをピットとした。調査で確認された土坑・ピットの総数は、土坑34基、ピット70基を数える。分布状況は住居址とほぼ一致し、B区西半には見られない。図示しうる遺物が出土したのは土21・31・38・48、P68で、土38が古墳時代後期であるほかは奈良～平安時代前期に帰属する。帰属時期のわからないものについても多くは奈良～平安時代に帰属するものであろう。

5. 凹地状の地形

B区西側、338住から西の一帯は、砂質土層及び砂層が分布しており、東側とは土層の堆積状況が異なっていた。土層の状況から流路があるものと考えて検出作業を行ったが、プランは明確に把握できなかった。一

部を掘削したところ土器などの遺物や、人為的に割られたり被熱痕のある礫がまとまって出土する地点が確認できた。砂質土及び砂層下には基本土層でVI層とした礫層が確認され、この礫層は所々で緩やかに落ち込み、凹地状の地形を呈していた。土器・礫群はこうした落ち込みを中心に出土していた。このため、凹地状の地形の確認及び遺物の回収のため広範囲に掘削を行った。掘削範囲は第6図中に図示した。

掘削により把握できた土層の堆積状況及び礫群の出土状況を第11図に示した。基本的な土層の堆積は礫層（基本土層VI層）に砂質土層・砂層が乗るもので、礫層が落ち込み凹地状となっている箇所では部分的に砂礫層が堆積し、一時的な流水の痕跡も確認できた。しかし、出土した土器・陶器がほとんど摩滅しておらず、また礫群は土層断面から考えうる水流の規模では運ぶことのできない大きさのものであることから、遺物は基本的には人為的に運ばれたものと考えられる。遺物は凹地状の部分を中心に出土しているが、平坦な箇所からも少量ながら出土している。遺物の年代は古墳時代後期から平安時代前期で、東側の集落域の年代と重なっており、第8次調査地点出土遺物と凹地状地形出土のもの間に接合関係が1例ではあるが確認できた（第17図136）ことから、集落域と密接な関係があったことが窺える。礫群の中には人為的に割られたと思われるものや被熱痕跡が見られるものが多数あり、これらはカマドの袖石であった可能性が高い。以上から、今回確認できた土器・陶器や礫群などの遺物は、おそらくはすぐ東側の集落域から持ち込まれたものと推測したい。

第1表 土坑一覧

土坑No.	区	図No.	平面形	規模(cm)		時期	備考
				長軸×短軸×深さ			
1	A	8	円形	66×<47>×20		不明	攪乱にあう
2	A	8	楕円形?	108×82×24		不明	攪乱にあう
3	A	8	楕円形	111×76×27		不明	土4を切る
4	A	8	楕円形	<90>×<57>×20		不明	土3・5に切られる
5	A	8	楕円形	182×<36>×25		不明	土5を切る
6	A	8	楕円形	140×105×31		不明	
8	A	8	円形	72×62×40		不明	
9	A	8	楕円形?	67×<48>×19		不明	攪乱にあう
10	A	8	楕円形?	158×<32>×17		不明	323住に切られる P47を切る
13	B	10	隅丸方形	90×68×21		不明	P24を切る
14	B	10	円形	87×<49>×22		不明	攪乱にあう
17	B	10	円形	72×<39>×48		不明	調査区外にかかる
18	B	10	円形	72×68×28		不明	
19	B	10	楕円形	<208>×53×27		不明	調査区外にかかる
20	A	8	楕円形	56×38×22		不明	319住を貼る
21	A	8	楕円形	110×88×20	奈良～平安		
22	A	8	不明	<58>×<44>×22	不明		攪乱にあう
23	A	10	円形?	74×<42>×24	不明		
24	A	10	楕円形	107×72×23	不明		P66を切る
25	A	10	楕円形	<93>×78×16	不明		P16・17に切られる
26	B	10	円形	84×80×25	不明		
27	B	10	隅丸長方形	74×<68>×26	不明		攪乱にあう
31	A	10	円形	31×29×5	奈良～平安		323住に貼られる
34	A	10	不明	65×<36>×21	古墳後期		攪乱にあう
35	A	10	楕円形	90×63×17	不明		P20に切られる
36	A	10	円形	70×65×6	不明		P12を切る
37	A	10	不明	<74>×<39>×7	不明		調査区外にかかる 土38に切られる 攪乱にあう
38	A	10	不明	<86>×<64>×8	奈良～平安		調査区外にかかる 土37を切る 攪乱にあう
39	B	10	円形?	178×<74>×16	不明		
43	B	10	円形?	77×<28>×13	不明		調査区外にかかる
44	A	10	楕円形	<47>×44×25	不明		攪乱にあう
45	A	10	円形?	<136>×<78>×20	不明		318住を切る 攪乱にあう
46	B	10	円形	191×171×42	不明		
48	B	10	円形	85×84×36	奈良～平安		

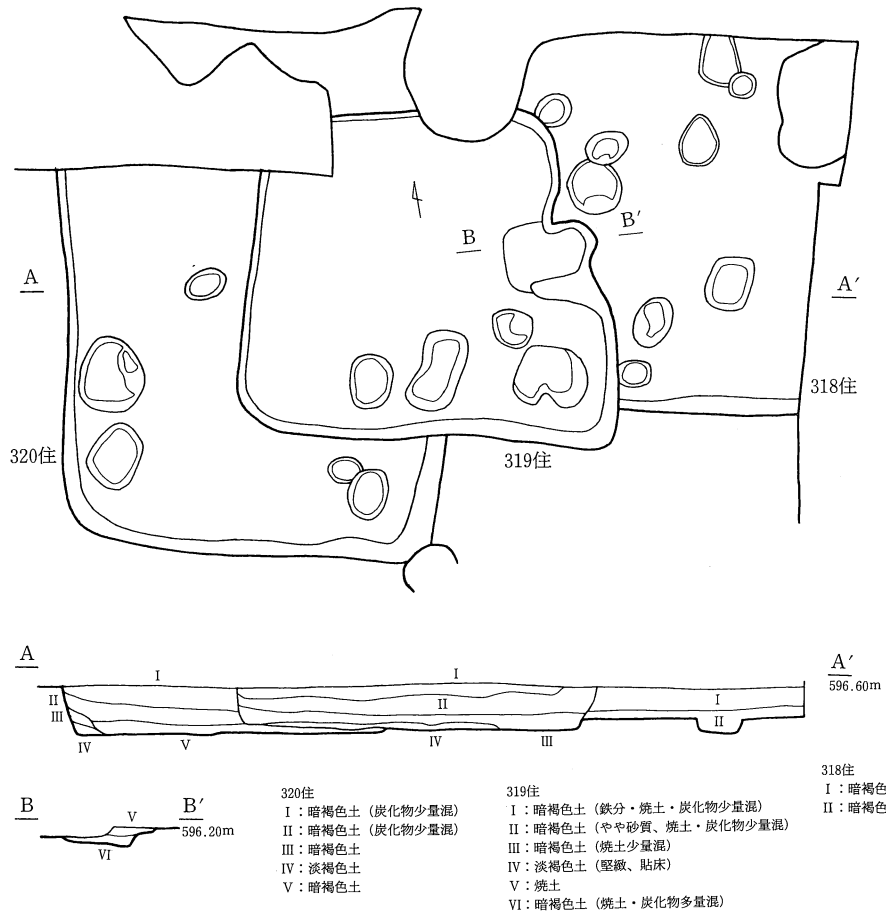
第2表 竪穴住居址一覧

No.	区	平面形	規模 (cm)				カマド形態 種類・位置	時期	備考	
			長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)				主軸方向
318	A	不明	<403>	<343>	33	10.1	N-12°-E	なし	3～4期	攪乱にあう 319住・土45に切られる
319	A	隅丸長方形	398	349	41	10.0	N-16°-E	東壁中央 不明	5期	攪乱にあう 318・319住を切る
320	A	不明	408	401	41	8.8	N-12°-E	なし	3期	攪乱にあう 319住に切られる P6を切る
321		欠番								
322		欠番								
323	A	隅丸長方形	<384>	366	33	11.6	N-17°-E	西壁 不明	3期	攪乱にあう 土10・31、P44～46を切る
324		欠番								
325	A	隅丸長方形	302	233	34	5.6	N-13°-E	なし		攪乱にあう P22を切る
326	A	不明	<280>	<50>	36	0.9	N-9°-E	なし	2～3期	攪乱にあう P18に切られる
327		欠番								
328	A	不明	429	<151>	28	4.2	N-10°-E	東壁?	4～5期	攪乱にあう P81を切る
329	A	不明	<352>	<180>	43	4.4	N-2°-E	東壁 石組みか	2～3期	攪乱にあう P15に切られる
330		欠番								
331		欠番								
332	B	不明	<150>	<146>	18	1.4	N-11°-E	南壁 石組みか	不明	攪乱にあう
333		欠番								
334		欠番								
335	B	隅丸長方形	403	<358>			N-21°-E		1～2期	336住に切られる 337住を切る 調査区外にかかる
336	B	隅丸長方形	<409>	374			N-22°-E	東壁 石組み	2期	335・337住を切る 調査区外にかかる 攪乱にあう
337	B	隅丸長方形	<422>	299			N-23°-E		1期	335・336住に切られる
338	B	隅丸長方形	440	424	32	12.6	N-9°-E	西壁中央 不明	古墳後期	攪乱にあう

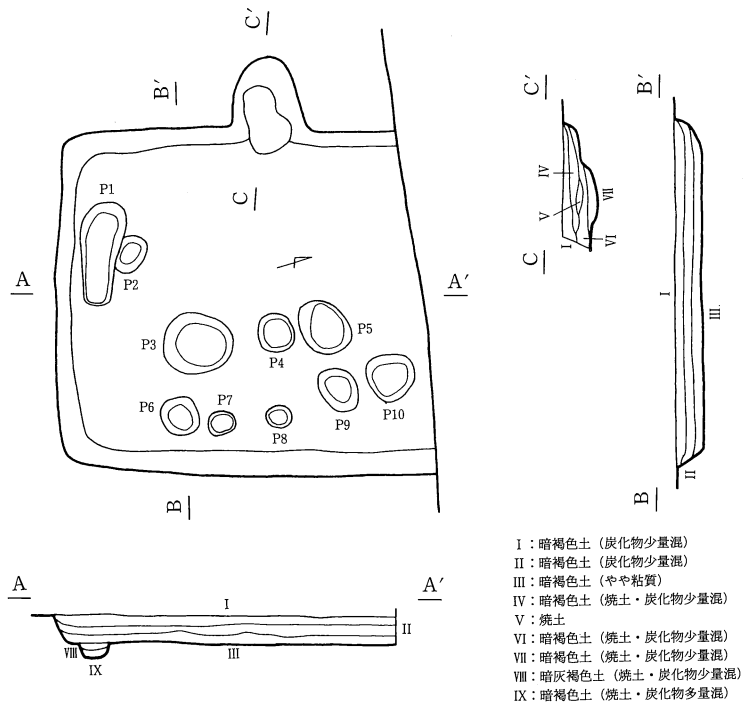
第3表 過去の調査一覧

調査次	実施年度	面積	調査成果	備考
I	昭和61年 (1986)	1325㎡	住居址5 (弥生後期1、古墳前期1、平安前期1、平安後期1) 竪穴状遺構1、土坑1、掘立柱建物址1、溝4	遺構面2枚 上が平安、下が弥生後期～古墳前期
II	昭和63年 (1988)	1715㎡	住居址1 (古墳後期) 土坑26、ピット61、溝1	
III	平成元年 (1989)	900㎡	住居址6 (古墳後期～平安前期)	
IV	平成3年 (1991)	14688㎡	住居址116 (古墳後期113、平安前期2、平安後期1) 掘立柱建物址21、溝11、土坑7、柱列2、ピット多数	平田里1～3号古墳(中期古墳)も調査
V	平成10年 (1998)	281㎡	住居址11 (古墳後期1、奈良1、平安前期5) 土坑6、ピット11	
VI	平成10年 (1998)	1486㎡	住居址4 (弥生後期前半3、古墳後期1) 竪穴状遺構2、掘立柱建物址3、溝6、土坑3、ピット55	遺構面2枚 上が古墳後期以降、下が弥生後期
VII	平成10年 (1998)	867㎡	住居址50 (古墳後期～奈良11、平安前期39) 掘立柱建物址1、溝2、土坑175、ピット13、遺物集中2	
VIII	平成11年 (1999)	3293㎡	住居址48 (古墳後期7、奈良～平安23)、掘立柱建物址1 土坑144、溝1、遺物集中2	
IX	平成11年 (1999)	240㎡	住居址2 (古墳後期) 遺物集中出土地点2 (古墳前期)、土坑4、ピット7	
X	平成11年 (1999)	560㎡	住居址4 (平安前期) 溝1、ピット5	
XI	平成13年 (2001)	188㎡	住居址3 (平安後期2、弥生後期1) 溝1、土坑7、ピット234	
XII	平成13年 (2001)	2197㎡	住居址13 (古墳後期1、奈良10、平安2)、土坑34、ピット70	

第318・319・320号住居址

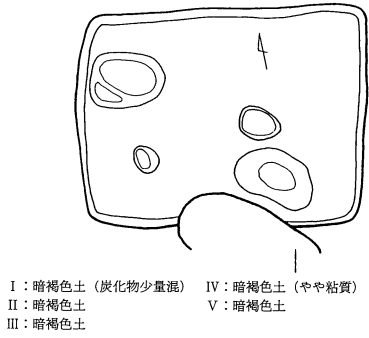


第323号住居址



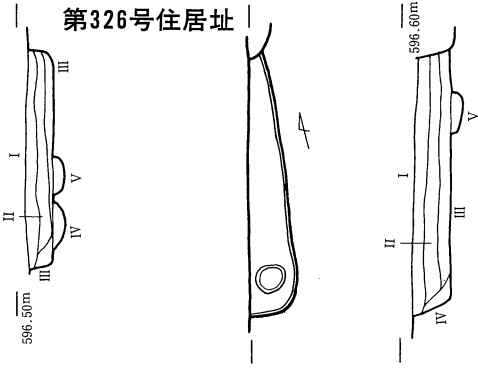
第7図 遺構(1)

第325号住居址



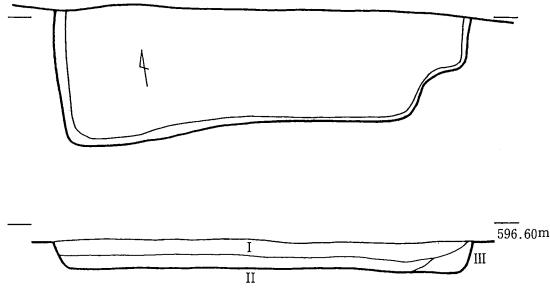
I : 暗褐色土 (炭化物少量混) IV : 暗褐色土 (やや粘質)
 II : 暗褐色土 V : 暗褐色土
 III : 暗褐色土

第326号住居址



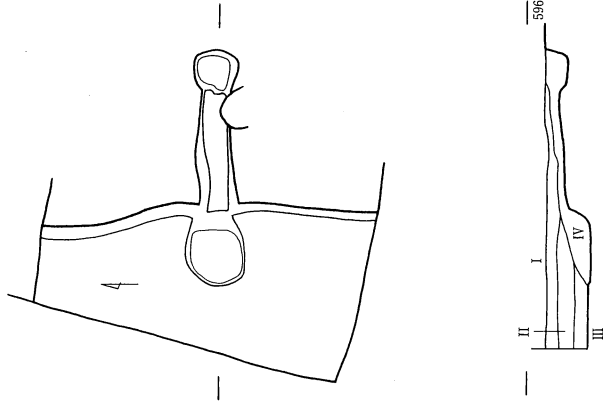
I : 暗褐色土 (炭化物少量混)
 II : 暗褐色土
 III : 暗褐色土
 IV : 暗褐色土
 V : 暗褐色土

第328号住居址



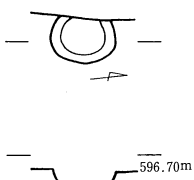
I : 暗褐色土 (鉄分多量混、径5cm程度の礫を含む)
 II : 暗褐色土 (径5cm程度の礫を含む)
 III : 暗褐色土 (焼土・径5cm程度の礫を含む)

第329号住居址

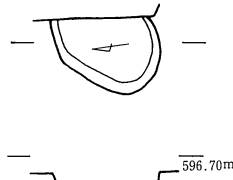


I : 暗褐色土 (径5cm程度の礫中量混) III : 暗褐色土 (径5cm程度の礫少量混)
 II : 暗褐色土 (径5cm程度の礫中量混) IV : 暗褐色土 (焼土・炭化物多量混)

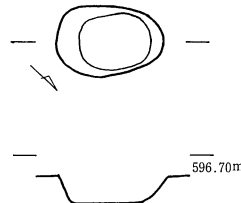
± 1



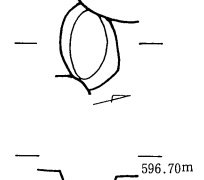
± 2



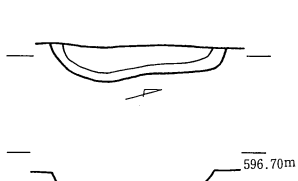
± 3



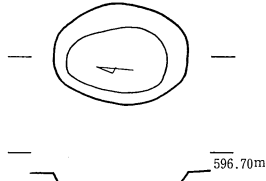
± 4



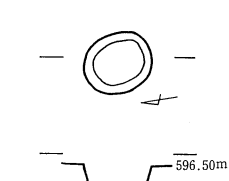
± 5



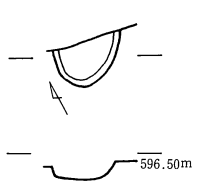
± 6



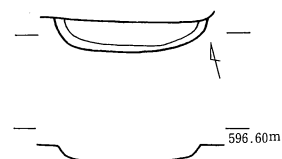
± 8



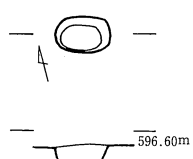
± 9



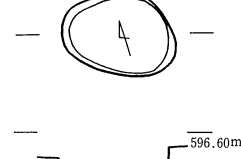
± 10



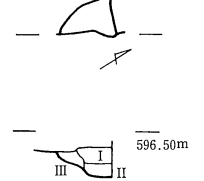
± 20



± 21



± 22



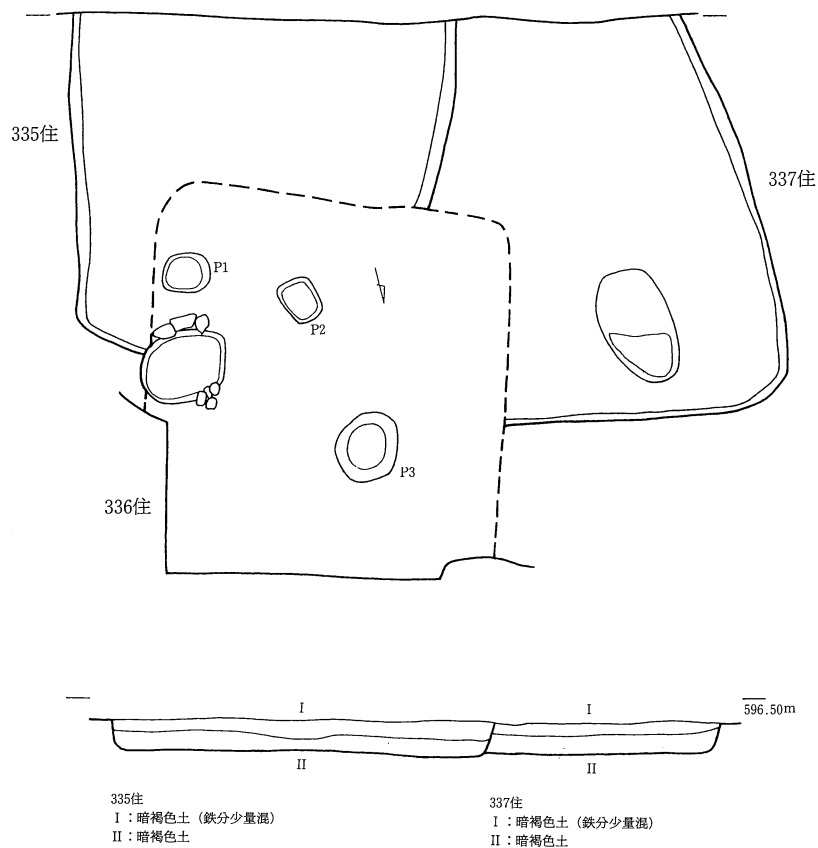
暗灰褐色土 (炭化物少量混)

I : 暗褐色土 (焼土中量・炭化物少量混)
 II : 暗褐色土 (焼土・炭化物少量混)
 III : 暗褐色土 (焼土・炭化物微量混)

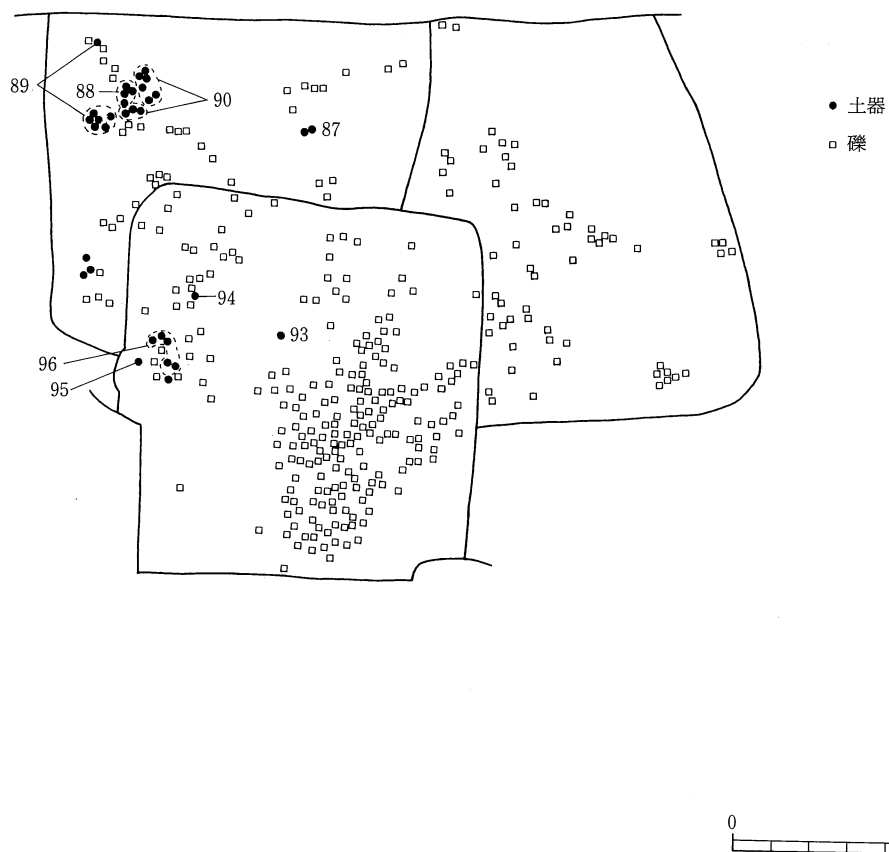


第8図 遺構(2)

第335・336・337号住居址

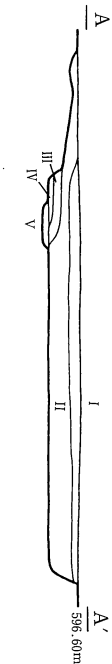


第335・336・337号住居址出土状況

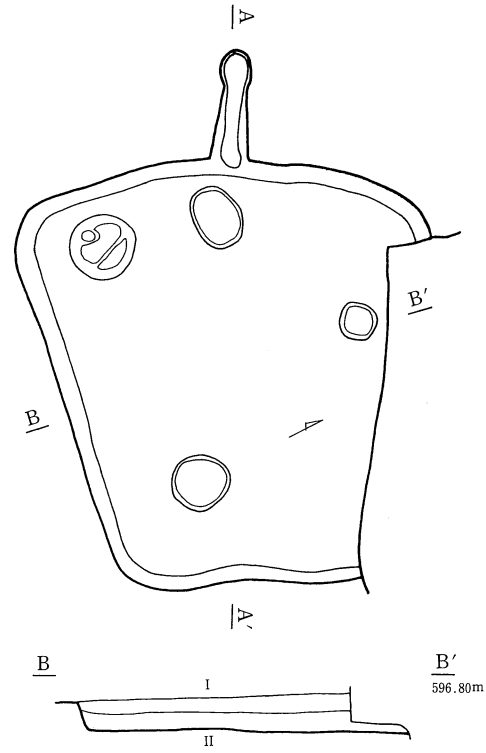


第9図 遺構(3)

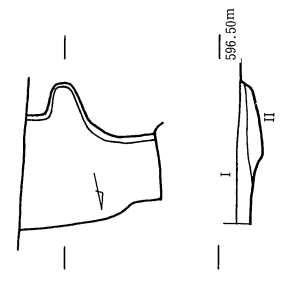
第338号住居址



- I: 暗褐色土 (径 2 cm 程度の礫中量混)
- II: 暗褐色土 (径 2 cm 程度の礫中量混)
- III: 暗褐色土 (焼土・炭化物少量混)
- IV: 暗褐色土 (焼土多量混)
- V: 暗褐色土 (焼土多量混)

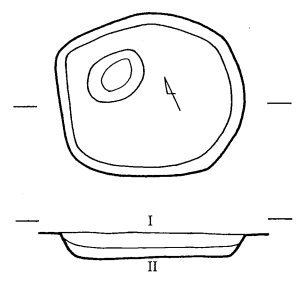


第332号住居址

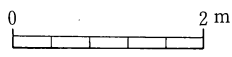
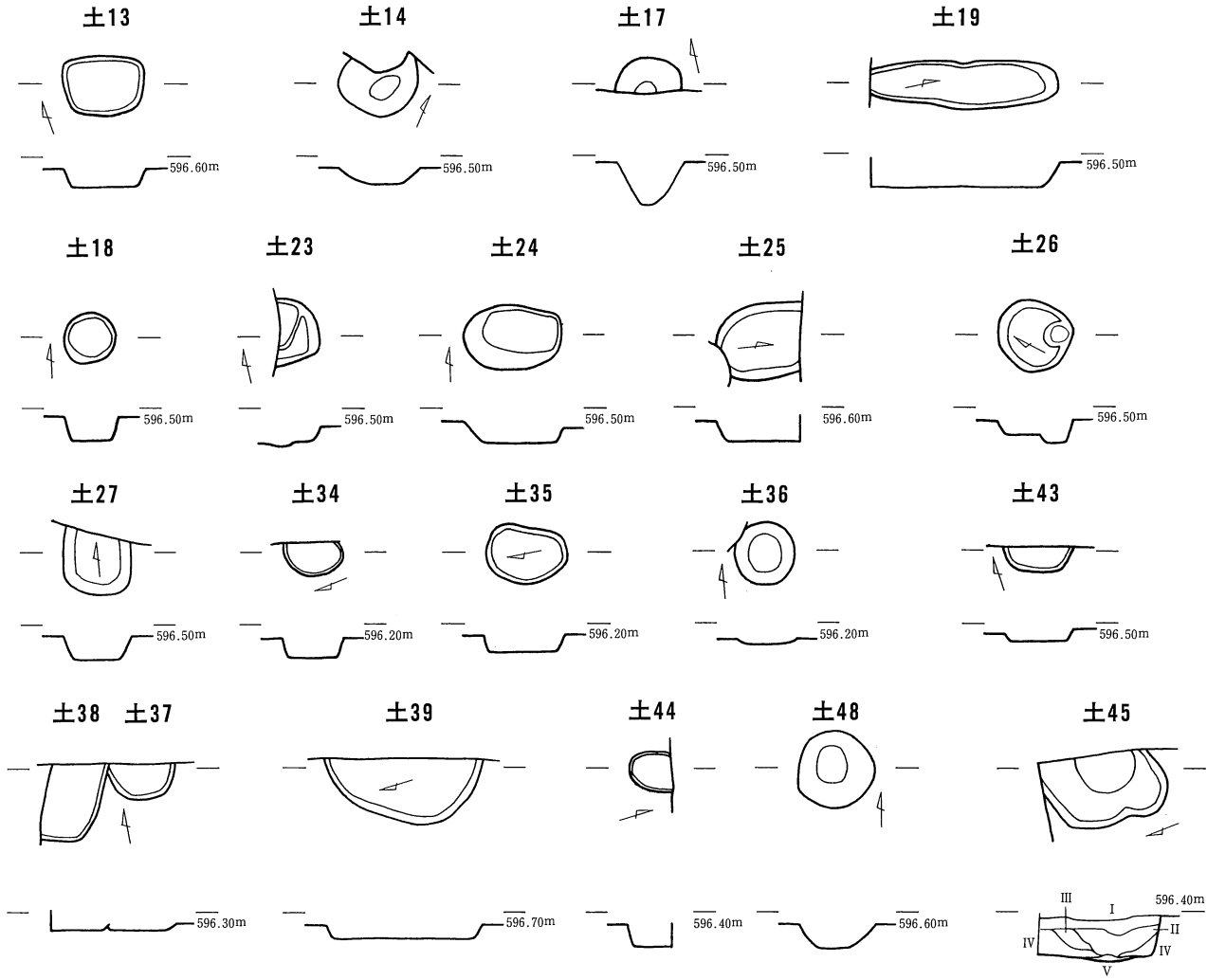


- I: 暗褐色土 (焼土・炭化物少量混)
- II: 暗褐色土 (焼土・炭化物多量混)

土46

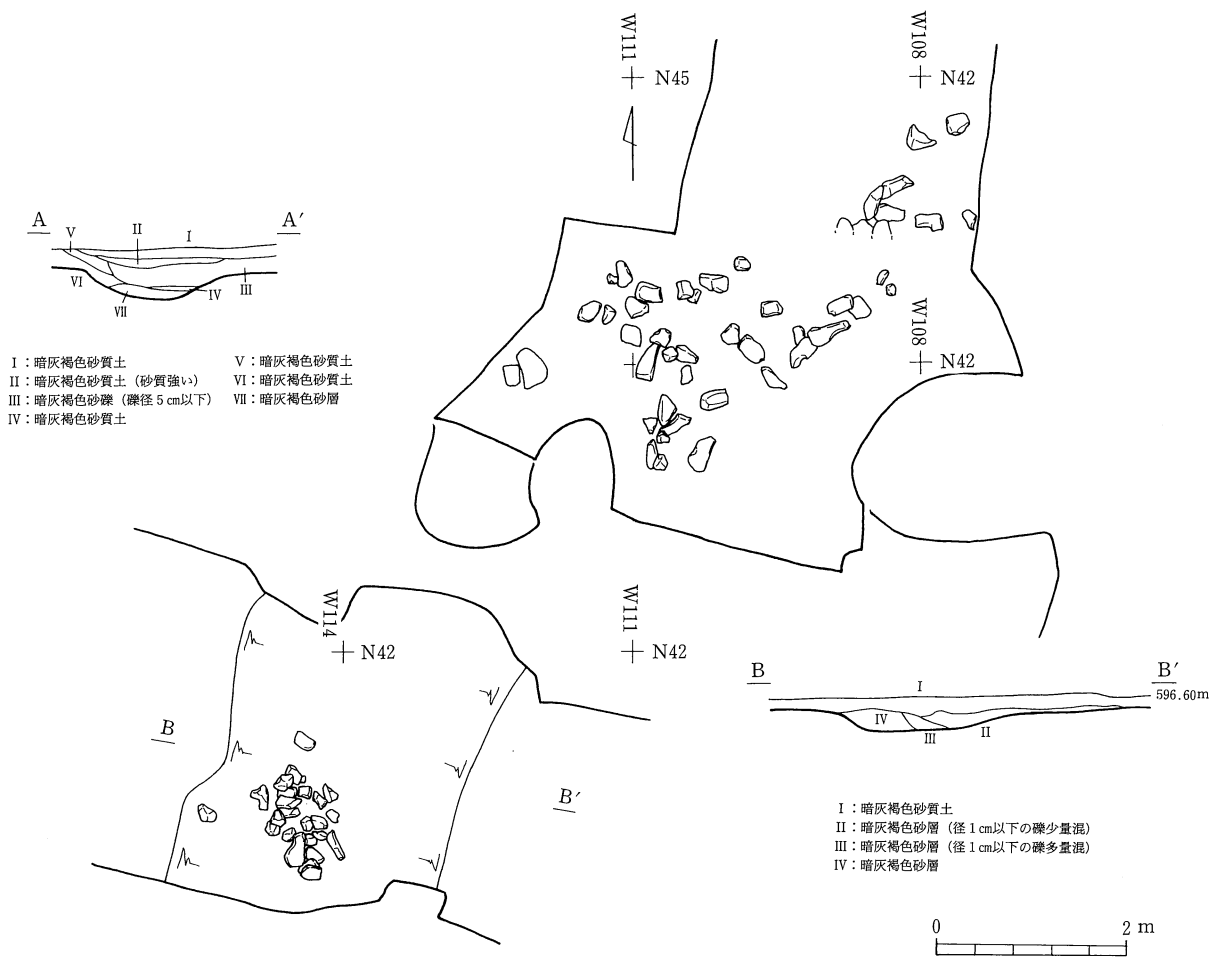


- I: 暗褐色土 (炭化物少量混)
- II: 暗褐色土

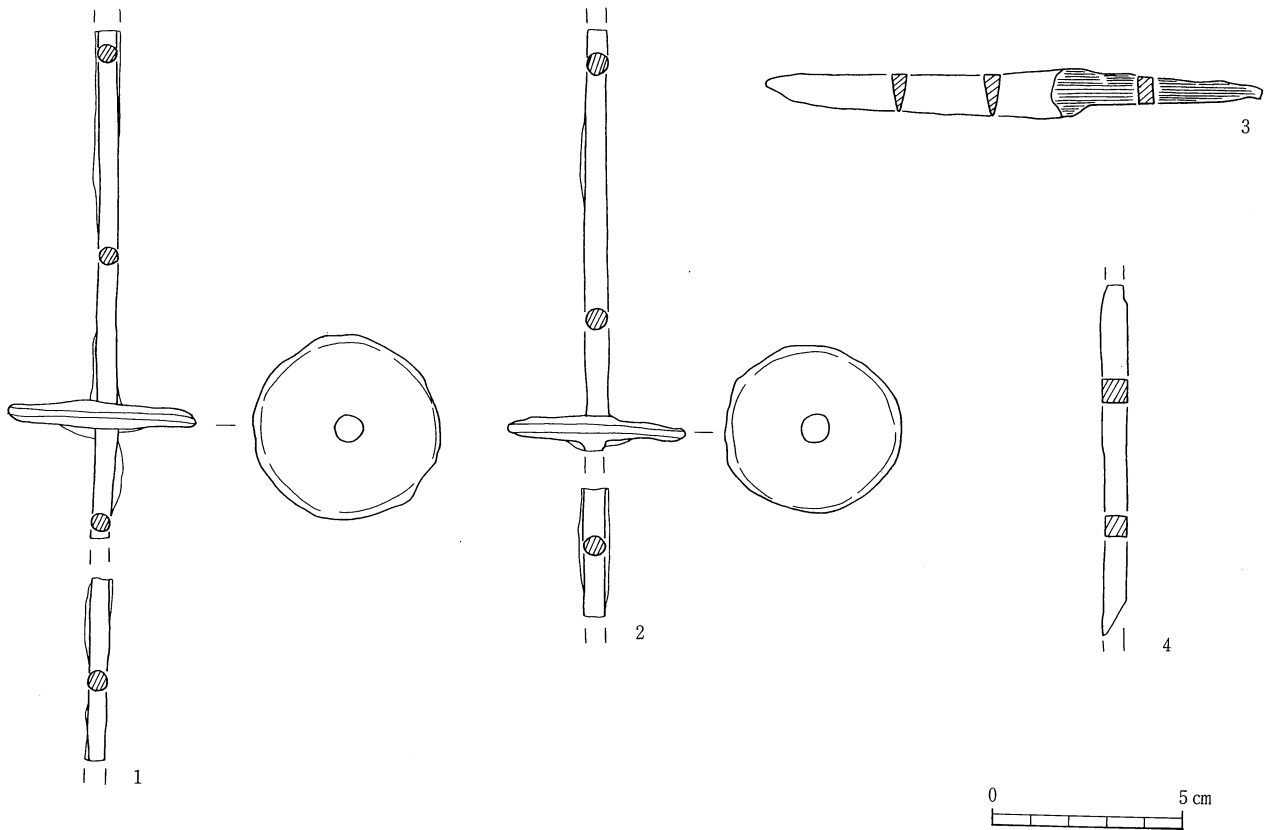


- I: 暗褐色土
- II: 暗褐色土 (茶褐色土粒少量含む)
- III: 暗褐色土 (径 3 cm 程度の礫少量混)
- IV: 暗褐色土 (炭化物・焼土少量混)
- V: 暗褐色土 (焼土少量混、炭化物多量混)

第10図 遺構(4)



第11図 遺構(5)



第12図 出土遺物(1)

V 遺物

1. 土器・陶器

今回の調査で出土した土器・陶器は、総重量で60,914gを計る。図示できたのは136個体である。年代的には古墳時代後期から平安時代前期にわたるが、奈良時代のものが主体を占める。以下の記述にあたっては例言7中に示した文献の編年観・器種・器形の名称に従った。

(1) 古墳時代後期の土器・陶器

338住出土土器群 (77~86)

10点を図示。遺物はカマド周辺の床面を中心に出土し、4,010gを計る。土師器のみで、食器に杯、煮炊き具に甕・台付甕、貯蔵具に小型壺がある。杯は、比較的浅く丸底で口縁部の内湾するもの(78)と、丸底で口縁部と底部の境界に屈曲を有するもの(77)とがある。78の内湾が緩やかであること、また77の屈曲が弱く直線的であることから、ともにこの器種として新しい特徴を持つ。甕は内外面ナデ調整のもの(84)と、ミガキ調整のもの(85・86)とがある。帰属時期は、杯の器形上の特徴から古墳時代後期でも後半、出川南第3段階であろう。

その他の遺構出土土器群

古墳時代の遺物が出土したその他の遺構として、土38・溝1がある。土38出土の土師器杯(64)は、口縁部と底部の境界に屈曲を有する器形のもの。内面の屈曲は強く、古墳時代後期前半、出川南第2段階に位置づけられる。溝1出土の土師器高坏(100)は、古墳時代のものだが、帰属時期は判然としない。A区検出面出土の須恵器杯蓋(66)は立ち上がり天井部の境界に、つまみ出しによる明瞭な稜が見られ、古い特徴を有する。古墳時代後期前半、出川南第1段階に帰属する。

(2) 奈良・平安時代の土器・陶器

出土した該期の土器・陶器の種別は、土師器・黒色土器A・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器である。灰釉陶器は小片が数点、また緑釉陶器は生地が1点出土したのみである。種別毎の細別器種は以下の通りである。

土師器 食器に杯が、煮炊き具に甕A・B・F、小型甕A・B・Eが、貯蔵具に小型壺がある。

黒色土器A 食器に杯Aがある。

須恵器 食器に杯A・B・D、杯蓋A・B、高坏、貯蔵具にフラスコ瓶、平瓶、甕、鉢A、短頸壺B・C・Dがある。須恵器には胎土の特徴等から美濃須衛窯産と思われるものがあり、杯A・杯蓋A・平瓶・甕が確認できた。

灰釉陶器 小片のため判然としないが食器の椀がある。

緑釉陶器 食器の椀(生地)がある。

以下、住居址出土資料を中心に概観する。

318住出土土器群 (1~5・7・27)

7点を図示した。遺物は覆土中および床面付近から出土し、2,464gを計る。7・27は319住として取り上げ、図示したが、出土状態から本来は318住に帰属するものと思われる。食器に黒色土器杯A、須恵器杯Aが、煮炊き具には土師器甕A・甕B・小型甕Aが確認された。須恵器杯Aの2は内外面に火だすきがある。底面は回転ヘラ切りの後にヘラ削りが施されている。7は美濃須衛窯産である。甕B(5)は口縁が外反し、内外面のハケ目が頸部直下でナデ消されている。3は類例が無く細別器種は不明である。出土点数が少なく土

器群全体の構成は不明であるが、須恵器杯Aおよび土師器甕Bの特徴から概ね3～4期に帰属すると考えられる。1は底部の形状などから古墳時代のものの混入品の可能性が高い。

319住出土土器群（6～29）

24点を図示。遺物は覆土中および床面付近から出土し、1,342gを計る。食器に黒色土器A杯A、須恵器杯A・杯Bが、煮炊き具に土師器甕A・小型甕D、貯蔵具に須恵器鉢Aがある。土器群の特徴として須恵器杯Aの占める比率が大きい。須恵器杯Aの外傾指数は74～91。底部を観察できた個体は全て回転糸切り未調整であった。杯Bは底部がヘラ削りされ、高台がほぼ垂直に降りて外側で接地している。22は口縁部が須恵器甕Aに似るが類例がなく細別器種を同定できない。小型甕Dは内面口縁付近および外面に丁寧にカキ目が施され、定型化したものである。杯A・Bおよび小型甕Dの特徴から5期に帰属すると考えられる。

320住出土土器群（30～38）

9点を図示した。遺物は覆土中及び床面付近から出土し、6,014gを計る。食器には須恵器杯A・杯蓋Bが、煮炊き具に土師器甕A・甕B・小型甕Bが確認された。須恵器杯Aは全て底部をヘラ切りした後にナデが施されている。杯蓋Bは口縁端部の断面が三角形で単に下に下がる形態である。煮炊き具の構成は甕Bが甕Aを卓越しているようである。甕Bは口縁が外反し、外面頸部直下のハケ目がナデ消されている。杯蓋Bおよび甕Bの特徴と煮炊き具の構成から3期に帰属すると考えられる。

323住出土土器群（39～47）

9点を図示。遺物はカマド内・カマド周辺を中心とした床面から多く出土し、5,158gを計る。食器に須恵器杯A、黒色土器A杯Aが、煮炊き具に土師器甕B・小形甕Bがある。須恵器杯Aの底面はヘラケズリによる。土師器甕Bの口縁部は比較的長く、直線的に開く。胴部外面のハケは1単位がまだそれほど長くはない。器厚はまだそれほど薄くはなっておらず、定型化以前のものである。3期に帰属する。

325住出土土器群（48・49）

2点を図示。遺物は覆土中から出土し、2,092gを計る。須恵器杯D・杯蓋Bがある。杯Dは口縁部の立ち上がりが長く、直立するもので、古墳時代後期のもの。杯蓋Bは端部が折れ曲がる形態のもの。破片資料では、煮炊き具の主体を土師器甕Aが占め、甕Bはごくわずかである。帰属時期は判然としないが、杯Dの存在及び土師器甕の様相から古墳時代後期から下っても2期の範囲に収まるものと思われる。

326住出土土器群（50～56）

7点を図示。遺物は覆土中より出土し、1,856gを計る。食器に須恵器杯B・杯蓋B、煮炊き具に土師器甕A、貯蔵具に須恵器短頸壺C・Dがある。須恵器杯Bは高台が外側に開きふんばる形態をとる。杯蓋Bは端部が下に折れ曲がるもの。破片資料から煮炊き具の主体は土師器甕Aが占めるようである。このことから2期に帰属するものと思われる。

328住出土土器群（57～60）

4点を図示。遺物は床面及びカマドと思われる焼土範囲から出土し、1,730gを計る。食器に須恵器杯A・B、煮炊き具に土師器甕Bがある。須恵器杯Aは底面が回転糸切り未調整、外傾指数は62。杯Bは高台がほぼ垂直に降りる。土師器甕Bは定型化したものである。5期に帰属する。

329住出土土器群（69～76）

8点を図示。遺物はカマド周辺の床面から出土し、3,520gを計る。食器に須恵器杯A、煮炊き具に土師器甕B・小形甕B、貯蔵具に須恵器甕Eがある。煮炊き具は図示できたものは甕Bが多いが、破片資料を含めると甕Aが卓越するようである。甕B・小形甕Bは、口縁部が比較的長く、外に強く開く。外面のハケは1単位が短い。2期に帰属するものか。

335住出土土器群 (87～90)

4点を図示。遺物は床面からまとまって出土し、2,582gを計る。食器に須恵器杯B・高坏が、煮炊き具に土師器甕A・Bがある。須恵器杯Bは高台が屈曲部のすぐ内側につき、ふんばる形態のもの。土師器甕Bは長胴のものである。破片資料では甕Aが甕Bを卓越するようである。1～2期に帰属する。

336住出土土器群 (91～96)

6点を図示。遺物はカマド及びその周辺の床面から多くが出土し、5,030gを計る。食器に須恵器杯A・杯B・杯蓋B、煮炊き具に甕B・小型甕Bがある。杯Aは底部の調整がヘラケズリによる。杯Bは高台が内よりに入り、高台はふんばる形態のもの。杯蓋Bは端部が折れ曲がる形態のもの。煮炊き具は破片資料も合わせると甕AとBが拮抗もしくは甕Aがやや卓越するようである。2期に帰属する。

337住出土土器群 (97～99)

3点を図示。遺物は床面を中心に出土し、1,790gを計る。食器に須恵器杯蓋B、煮炊き具に甕Fがある。杯蓋Bは端部が折れ曲がる形態のもの。甕Fは外面ミガキ調整で、口縁部は緩やかに外反する。出土点数が少なく詳細が不明だが、1期に帰属するものか。

凹地状地形出土土器群 (106～136)

36点を図示。土器群は、礫群が出土した地点の周辺にまとまる傾向があるが、それ以外は散発的に出土しており、7,772gを計る。土器群には土師器・黒色土器A・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器(生地)があるが、灰釉陶器は小片がわずかに出土したのみ、また緑釉陶器は1点のみの出土である。いずれも摩滅をほとんど受けていない。図示できたものは須恵器の食器・貯蔵具が多いが、破片資料を含めても土師器は量的に少なく、住居址出土資料とは異なる構成を示している。年代的には奈良時代～平安時代前期の範囲に収まり、灰釉陶器が食器の主体を占める時期までは下らないと思われる。図示できたものでは、食器に黒色土器A杯、須恵器杯A・B・杯蓋B、煮炊き具に土師器甕A、貯蔵具に須恵器甕がある。なお、今回の調査地点で出土した緑釉陶器と、第8次調査地点184住出土のものが接合したため、8次調査時出土のものを図示した。

土坑・ピット出土土器群

図示できた遺物が出土している土坑・ピットに土21・31・48、P68がある。詳細な帰属時期は不明だが、住居址の時期とほぼ同時期と考えて差し支えなからう。

2. 金属器

4点を図示した。紡錘車が2点・刀子1点・釘1点がある。1・3は320住出土で3期に、2は325住出土で古墳時代後期～奈良時代に帰属する。4はA区検出面出土。紡錘車は2点とも紡輪部が完存し、紡軸部の両端を欠く。1は紡輪部の直径が48mm、厚さは中心部で7mm、縁部で4mmで、紡軸部の直径は5mm、重量は57.0gを計る。2は紡軸部の直径が46mm、厚さは中心部で6mm、縁部で4mm、紡軸部の直径は5～6mm、重量は44.6gを計る。3はほぼ完存しており、両関で棟関・刃関とも緩やかに立ち上がり、棟側はいったん減幅した後直線的になり、刃側が緩やかに減幅する。莖部から身部にかけては木質が錆着する。全長13.0cm、身部長8.2cm、最大幅12.5mm、厚さ4.5mm、莖部最大幅8mm、厚さ4mm、重量は15.2gを計る。4は断面が方形で両端を欠く釘か。現存長92mm、幅7mm、重量13.4gを計る。

第4表 出土土器・陶器一覧

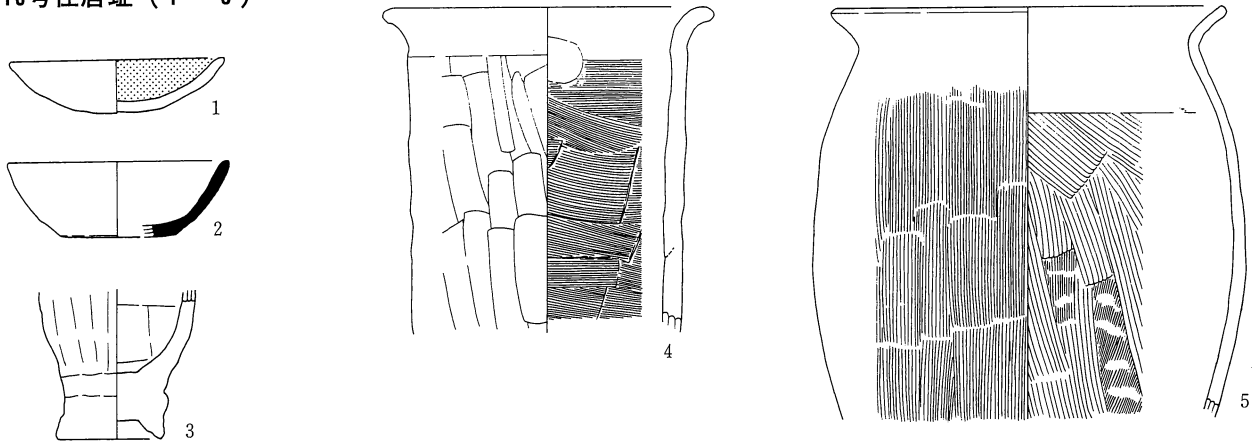
No	出土地点	実測番号	種別	器種	法量			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口径	底部	外面	内面	
1	318住	318-2	黒A	杯	11.4	2.4	2.8	1/8	1/8	明橙褐	黒	内外ともナデ 外面摩滅
2	318住	318-1	須恵	杯A	11.6	6.0	4.0	1/5	一部	青灰	青灰	内外ともクロロナデ 底部ヘラケズリ
3	318住	318-5	土師			5.7		完		褐	褐	外面工具ナデ 内面ケズリ
4	318住	318-4	土師	甕A	17.4			1/4		明褐-黒褐	暗橙褐	外面ケズリ口縁部付近ナデ 内面ハケ口縁部付近ナデ
5	318住	318-3	土師	甕B	20.8			1/2		明橙褐	明橙褐	内外とも口縁部付近ナデ 胴部ハケ
6	319住	341-12	黒A	杯?	11.9			1/6		明橙褐	黒	外面口クロナデ 内面横ミガキ
7	319住	341-1	須恵	杯A	8.4	4.8		1/8		明灰褐	明灰褐	内外ともクロロナデ 美濃須衛窯産か
8	319住	319-1	須恵	杯A	10.8			1/4		青灰	青灰	内外ともクロロナデ
9	319住	319-6	須恵	杯A	10.8			1/6		灰褐	灰褐	内外ともクロロナデ
10	319住	341-8	須恵	杯A	12.0	5.8	3.4	1/5	2/3	暗灰褐	暗灰褐	内外クロロナデ 底面回転糸切り未調整
11	319住	341-7	須恵	杯A	11.6	5.9	3.2	2/3	完	青灰	青灰	内外クロロナデ 底面回転糸切り未調整
12	319住	319-3	須恵	杯A	12.0	3.8		1/8	1/2	明淡褐	明淡褐	内外ともクロロナデ 底面調整不明
13	319住	341-3	須恵	杯A	19.8	7.4	4.1	1/8	1/3	灰白	灰白	内外ともクロロナデ 底面回転糸切り未調整か
14	319住	341-2	須恵	杯A	14.8			1/5		灰褐	灰褐	内外ともクロロナデ
15	319住	319-2	須恵	杯A	11.1			1/5		青灰	青灰	内外ともクロロナデ
16	319住	341-6	須恵	杯A		5.6		1/6		明灰褐	明灰褐	内外クロロナデ 底面回転糸切り未調整 美濃須衛窯産か
17	319住	341-5	須恵	杯A		6.2		1/4		青灰	青灰	内外クロロナデ 底面回転糸切り未調整
18	319住	319-4	須恵	杯A			7.0	1/3		暗灰褐	暗灰褐	内外ともクロロナデ 底面回転糸切り未調整
19	319住	341-4	須恵	杯B		8.2		1/4		明灰褐	明灰褐	内外ともクロロナデ 付高台後ナデ 底面回転ヘラケズリ
20	319住	341-10	須恵	鉢A?	12.2			1/8		明灰褐	明灰褐	内外ともクロロナデ
21	319住	341-9	須恵	鉢A?	19.2			1/16		暗灰褐	暗灰褐	内外ともクロロナデ
22	319住	341-11	須恵	甕?	21.2			1/4		暗灰褐	暗灰褐	内外ともクロロナデ 口縁部付近自然釉付着
23	319住	341-15	土師	小形甕D	10.6			2/3		暗褐~橙褐	暗褐~橙褐	内面クロロナデ口縁部カキ目 外面カキ目口縁部クロロナデ
24	319住	341-13	土師	小形甕D	12.8	7.2 (14.1)		1/4	1/2	暗褐~橙褐	暗褐~橙褐	内面クロロナデ口縁部カキ目 外面カキ目口縁部横ナデ 底面回転糸切り未調整
25	319住	341-16	土師	小形甕D		6.8		1/4		暗褐~橙褐	暗褐	内面クロロナデ 外面カキ目 底面回転糸切り
26	319住	341-14	土師	小形甕D		5.6		1/2		褐	明褐	内面クロロナデ 外面カキ目 底面ナデ
27	319住	341-18	土師	小形甕A	12.9			1/6		暗褐	褐	外面工具ナデ 内面ハケ口縁部横ナデ
28	319住	341-19	土師	甕A		8.6		1/4		暗褐	暗褐	外面工具ナデ 内面・底面ナデ
29	319住	341-17	土師	甕A		9.2		1/2		暗褐	黄褐~黒褐	内面工具ナデ 外面ナデ
30	320住	320-1	須恵	杯蓋B	13.8			1/5		明灰褐	明灰褐	内外ともクロロナデ 外面天井部付近回転ヘラケズリ
31	320住	320-2	須恵	杯	11.0			1/16		明灰褐	明灰褐	内外ともクロロナデ
32	320住	320-5	須恵	杯A		4.4		3/4		暗灰褐	暗灰褐	内外ともクロロナデ 底面ナデ
33	320住	320-4	須恵	杯A		7.2		1/4		黒褐	黒褐	内外ともクロロナデ 底面ナデ
34	320住	320-3	須恵	杯A?	15.4	9.2	4.8	1/16	1/5	明黄白	明黄白	内外ともクロロナデ
35	320住	320-6	土師	小形甕B	11.1			1/4		暗黄褐	黄褐	内面ナデ 外面ハケ口縁部横ナデ
36	320住	320-9	土師	甕B	20.4			1/4		暗褐	暗褐	内面ナデ 外面ハケ後口縁部横ナデ
37	320住	320-8	土師	甕B	21.4			1/4		明褐	暗褐	内面ナデ 外面口縁部ナデ 胴部ハケ
38	320住	320-7	土師	甕A	10.4			1/3		暗褐	暗褐	内外ともナデ一部工具ナデ 底面木葉痕

No.	出土地点	実測番号	種別	器種	法量		残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口縁	底部	外面	
39	323住	323-3	黒A	杯A?	14.5		1/16		暗褐	黒	内外ともクロロナデ
40	323住	323-2	須恵	杯A	13.5		1/16		灰褐	灰褐	底面付近回転ヘラケズリ 底面手持ちヘラケズリか
41	323住	323-1	須恵	杯A	14.0		1/6		灰褐	灰褐	内外ともクロロナデ 外面に火だすき痕あり
42	323住	323-5	土師	小形甕B		7.6		完	暗褐	明橙褐	外面ナデ一部ハケ 内面ナデ 底面ナデ
43	323住	323-4	土師	甕B		8.4	3/4		暗橙褐	暗橙褐	内面カキ目 外面ハケ
44	323住	323-6	土師	甕B		10.0	1/4		暗橙褐	暗橙褐	外面ハケ 内面工具ナデ 底面ナデ
45	323住	323-7	土師	小形甕B	15.3	9.4	18.4	完	明橙褐	明橙褐	内外ともハケ口縁部ナデ 底面ナデ
46	323住	323-9	土師	甕B	22.6		1/16		明橙褐	暗褐	内外ハケ口縁部ナデ
47	323住	323-8	土師	甕B	32.2		1/5		暗褐	暗褐	外面ハケ口縁部ナデ 内面ナデ口縁部カキ目
48	325住	325-2	須恵	杯D	9.4		1/8		暗灰褐	暗灰褐	内外ともクロロナデ 外面自然釉付着
49	325住	325-1	須恵	杯蓋B	15.4		1/8		灰褐	明灰褐	内外ともクロロナデ 天井部付近回転ヘラケズリ
50	326住	326-1	須恵	杯蓋B	14.4		1/6		明灰褐	明灰褐	内外ともクロロナデ 外面自然釉付着
51	326住	326-3	須恵	杯B		11.0		1/4	灰褐	灰褐	内外ともクロロナデ 付高台後ナデ 底面回転ヘラケズリ
52	326住	326-2	須恵	杯B		9.4		1/3	灰褐	灰褐	内外ともクロロナデ 付高台後ナデ 底面回転ヘラケズリ
53	326住	326-6	須恵	杯A?		8.0		1/4	黒褐	黒褐	内外ともクロロナデ
54	326住	326-5	須恵	短頸壺C	14.0		1/8		灰褐	灰褐	内外ともクロロナデ
55	326住	326-4	須恵	短頸壺D	19.8		1/8		青灰	青灰	内外ともナデ 底面ナデ
56	326住	326-7	土師	甕A?		4.6	1/3		明黄褐～黒	明黄褐	内外ともクロロナデ 底面回転ヘラケズリ
57	328住	328-2	須恵	杯A	12.0	4.0	1/5	1/2	青灰	灰褐	内外ともクロロナデ 底面回転ヘラケズリ
58	328住	328-1	須恵	杯B	13.2	9.8	1/5	1/6	暗灰褐	灰褐	内外ともクロロナデ 付高台後ナデ
59	328住	328-4	土師	甕B	20.6		1/6		暗褐	暗褐	外面ハケ口縁部横ナデ 内面ナデ
60	328住	328-3	土師	甕B	19.2		一部		明橙褐	明橙褐	外面ハケ口縁部横ナデ 内面ナデ口縁部カキ目
61	土48	土-3	須恵	短頸壺B	9.0		1/8		暗青灰	暗青灰	内外ともクロロナデ
62	土21	土-1	須恵	杯A		8.4		1/5	暗灰褐	暗灰褐	内外ともクロロナデ 底面回転糸切り未調整
63	332住	332-1	須恵	杯A		8.0		1/2	灰褐	灰褐	内外ともクロロナデ 底面回転ヘラケズリ
64	土38	土-2	土師	杯	16.2		1/4		暗橙褐	暗橙褐	内外面摩擦 内外ともミガキか
65	土31	土-5	須恵	短頸壺?		12.4		完	明灰褐	明灰褐	内外ともクロロナデ
66	検出面	検-1	須恵	杯蓋	10.6		1/8		暗灰褐	暗灰褐	内外ともクロロナデ
67	339住	339-1	須恵	?		8.8		1/3	青灰	青灰	内外ともナデ 底面付近・底面回転ヘラケズリ
68	検出面	検-2	須恵	フラスコ瓶	18.2		1/8		灰白	灰白	内外ともクロロナデ 内外に自然釉付着 美濃須衛窯産
69	329住	329-1	須恵	杯A	14.2		1/5		灰褐	灰褐	内外ともクロロナデ
70	329住	329-5	土師	小形甕B	14.4		1/6		黄褐	明橙褐	外面ハケ口縁部横ナデ 内面ナデ口縁部ハケ
71	329住	329-3	土師	甕B	18.6		完		明橙褐-褐	褐	外面ハケ摩擦減口縁部ナデ 内面ナデ
72	329住	329-7	土師	甕A	23.2		1/6		明黄褐	明黄褐	外面ハケ後ナデ 内面摩擦 工具ナデか
73	329住	329-4	土師	甕B	23.2		1/4		暗褐	暗褐	内外ともハケ口縁部横ナデ 胴部下内外面に炭化物付着
74	329住	329-6	土師	甕B		7.6		1/2	明橙褐	褐	外面ハケ 内面ハケ後ナデ
75	329住	329-8	須恵	平瓶?					明灰褐	明灰褐	内外ともクロロナデ 外面上半自然釉付着 外面2条沈線と櫛歯状工具による短沈線
76	329住	329-2	須恵	甕E	29.4		1/8		明黄褐	明黄褐	外面摩擦減タタキ目か? 内面クロロナデ
77	338住	345-6	土師	杯				完	明橙褐	褐-暗褐	外面摩擦上半ミガキ、下半ケズリか 内面ミガキ
78	338住	345-3	土師	杯	14.6	5.9	1/4	1/2	明橙褐	黒	内外ともミガキ

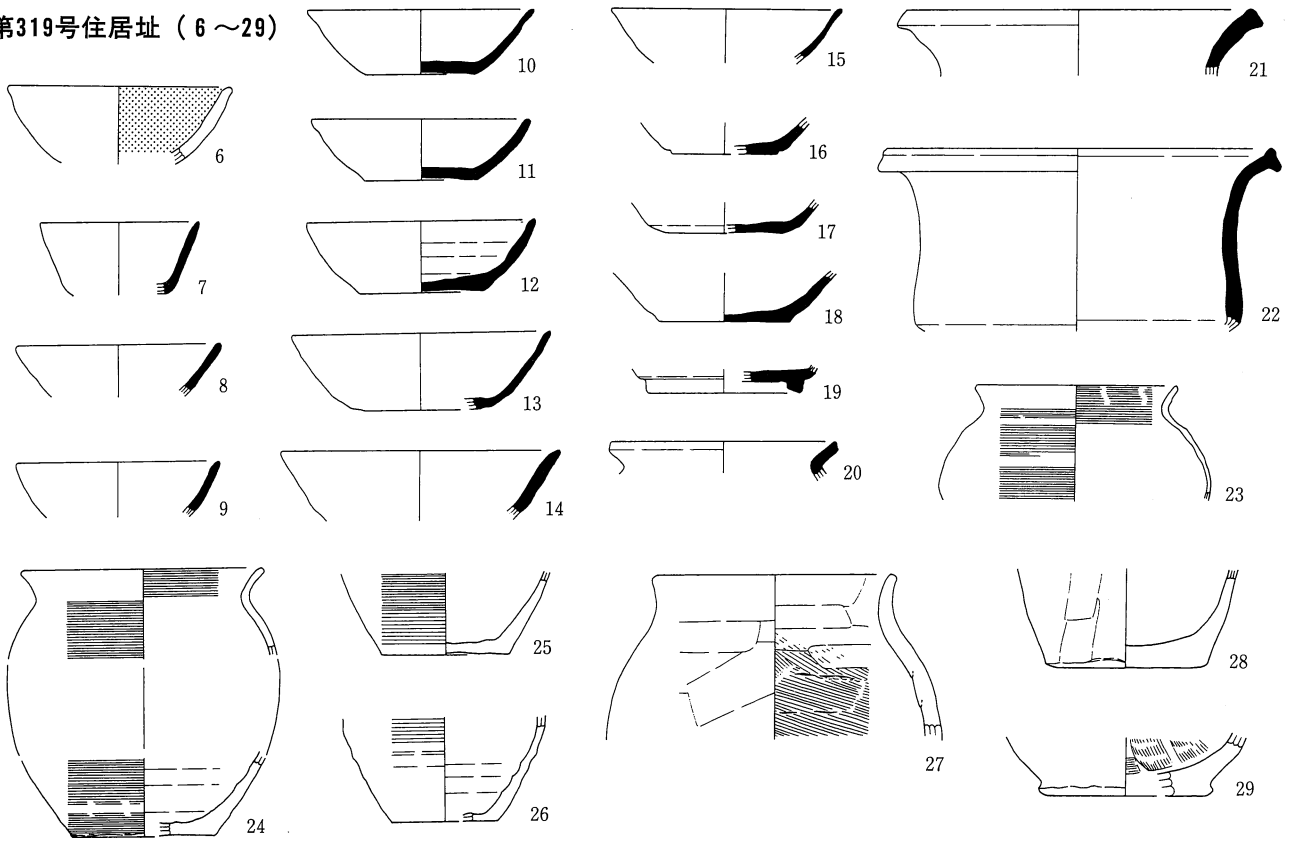
No.	出土地点	実測番号	種別	器種	法量			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面	
79	338住	345-5	土師	?	6.4		1/2		暗褐	褐	内外とも摩滅 ミガキか	
80	338住	345-8	土師	台杯甕	5.1		完		暗褐	明黄褐	内外とも横ナデ 底面ナデ	
81	338住	345-2	土師	小型壺	10.4		1/6		明橙褐	暗褐	内外ともナデ	
82	338住	345-7	土師	小型壺	6.4		完		暗褐	黒褐	外面ナデ摩滅 内面粗い横ナデ	
83	338住	345-4	土師	壺?					暗褐	褐	内外ともミガキ	
84	338住	345-1	土師	甕A	19.4		1/8		明橙褐	暗褐	内外ともミガキナデ 口縁部横ナデ	
85	338住	345-9	土師	甕F	21.6		1/2		褐	褐	外面ミガキ口縁部ナデ 内面横ナデ後ミガキ	
86	338住	345-10	土師	甕F	7.0		1/3		橙褐	橙褐	外面ミガキ 内面上半ミガキ 下半横ナデ 底面ナデ	
87	335住	335-1	須恵	杯B	17.2	4.1	1/5		暗青灰	暗青灰	内外ともクロクロナデ 付高台後ナデ 底面回転ヘラケズリ 外面に自然釉付着	
88	335住	335-2	須恵	高坏	15.0	9.2	3/4	完	青灰	青灰	内外ともクロクロナデ 杯部底面回転ヘラケズリ	
89	335住	335-4	土師	甕A	11.4		完		明橙褐	明橙褐	内外とも工具ナデ 底面ナデ	
90	335住	335-3	土師	甕B	7.6		1/4		褐	褐	外面ハケ 内面工具ナデ	
91	336住	355-1	須恵	杯蓋B	15.4		1/8		暗青灰	暗青灰	内外ともクロクロナデ	
92	336住	355-2	須恵	杯蓋B	15.0		1/8		暗青灰	暗青灰	内外ともクロクロナデ	
93	336住	355-3	須恵	杯A	8.1		完		暗灰褐	暗灰褐	内外ともクロクロナデ 底面ヘラケズリ	
94	336住	355-4	須恵	杯B	16.4	3.4	一部	1/2	暗青灰	暗青灰	内外ともクロクロナデ 付高台後ナデ 底面回転ヘラケズリ	
95	336住	355-6	土師	小形甕B	13.7	7.2	完		褐~赤褐	褐	外面ハケ 内面工具ナデ 口縁部横ナデ 底面木葉痕	
96	336住	355-5	土師	甕B					明褐	褐	外面ハケ 内面ナデ	
97	337住	337-1	須恵	杯蓋B	14.0		1/8		灰褐	灰褐	内外ともクロクロナデ 外面自然釉付着	
98	337住	337-3	土師	甕F					褐	暗褐	外面ナデ後ミガキ 内面ナデ一部ハケ	
99	337住	337-2	土師	甕F	29.4		1/5		褐	褐	外面ハケ後ミガキ 内面横ナデ後一部ミガキ口縁部ハケ	
100	溝	357-1	土師	高坏					明橙褐	明橙褐	外面ミガキ摩滅 内面上半絞り痕 下半ナデ	
101	N48W117	357-4	須恵	杯B	7.6		1/8		青灰	青灰	内外ともクロクロナデ 付高台後ナデ 底面回転ヘラケズリ	
102	N48W117	357-3	須恵	杯A	12.2		1/8		青灰	青灰	内外ともクロクロナデ	
103	N48W117	357-2	須恵	杯A	12.2		1/6		青灰	青灰	内外ともクロクロナデ	
104	N48W117	357-1	須恵	杯A	14.4		1/8		青灰	青灰	内外ともクロクロナデ 外面火だすき痕あり	
105	N48W117	357-5	須恵	甕?					灰白	灰白	内外ともクロクロナデ 底部付近回転ヘラケズリ 外面自然釉付着 美濃須衛窯産か	
106	N45W108	西流-18	須恵	短頸壺B	7.8		一部		暗灰褐	暗灰褐	内外ともクロクロナデ	
107	N45W108	西流-3	須恵	杯A	11.6	8.0	1/8	完	灰褐	灰褐	内外ともクロクロナデ 底面ヘラ切り後ヘラケズリ	
108	N45W111	西流-6	須恵	杯B	7.8		完		明橙褐	明橙褐	内外ともクロクロナデ 付高台後ナデ 底面回転ヘラケズリ	
109	N45W114	西流-8	須恵	杯B	9.4		1/4		暗褐	黄褐	内外ともクロクロナデ 付高台後ナデ 底面回転ヘラケズリ	
110	N45~48W108	西流-20	須恵	蓋					暗灰褐	暗灰褐	内外ともクロクロナデ	
111	N45W108	西流-17	須恵	短頸壺D	15.8		1/12		暗灰褐	青灰	内外ともクロクロナデ	
112	N48W108	西流-5	須恵	杯A	8.5		完		明灰褐	明灰褐	内外ともクロクロナデ 底面ヘラ切り後ヘラケズリ	
113	N33W117 N42W111	西流-14	須恵	短頸壺D	14.2		1/8		明黄褐	明黄褐	内外ともクロクロナデ	
114	N42W108 ~111	西流-15	須恵	鉢A	14.8		1/12		灰白	灰白	内外ともクロクロナデ 美濃須衛窯産か	
115	N45W108	西流-29	須恵	甕A	20.8		1/8		灰褐	灰褐	内外ともクロクロナデ 外面自然釉付着 美濃須衛窯産の可能性高い	

No.	出土地点	実測番号	種別	器種	法量			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面	
116	N39W114 N42W111 N45W108	西流-30	須恵	甕A						暗灰褐	灰褐	内外クロロナデ 外面自然釉付着 美濃須衛窯産
117	N42W111 ~114	西流-4	須恵	杯A	5.2			1/2		暗青灰	暗青灰	内外ともクロクロナデ 底部付近外面回転ヘラケズリ 底面ヘラ切りか
118	N39W111 ~114	西流-2	須恵	杯	13.6		1/5			灰褐	灰褐	内外ともクロクロナデ 底部付近外面回転ヘラケズリ
119	N42W111 ~114	西流-7	須恵	杯B	13.6	9.7	3.7	一部	1/8	青灰	青灰	内外ともクロクロナデ 付高台後ナデ 底面回転ヘラケズリ
120	N30W123 ~126 N39W114	西流-22	須恵	甕		10.4			1/3	明橙褐	明橙褐	外面ヘラケズリ 内面横ナデ 底面ナデ
121	N39W114	西流-10	須恵	高坏						青灰	青灰	杯部外面クロクロナデ内面回転ヘラケズリ 脚部クロクロナデ
122	N39W111 ~114	西流-11	須恵	高坏		10.8		一部		青灰	青灰	外面クロクロナデ
123	N39W114	西流-21	須恵	平瓶						黒褐~暗緑	暗灰褐	内外ともクロクロナデ 上半に自然釉付着
124	N39W111 ~114	西流-16	須恵	短頸壺D	18.4			1/12		暗灰褐	暗灰褐	内外ともクロクロナデ
125	N39W111 ~114	西流-19	須恵	甕A	26.0			1/12		暗灰褐	灰褐	内外ともクロクロナデ
126	N36W114	西流-31	須恵	甕?						褐~暗褐	暗褐	内外クロクロナデ 把手貼り付け後ナデ
127	N39W117 ~120	西流-13	黒A	杯A	12.4	5.0	3.5	1/2	1/2	褐	黒	外面クロクロナデ 内面口縁部横ミガキ下半縦ミガキ 底面回転糸切り未調整
128	N39W120 N42W120	西流-12	黒A	杯	15.8			1/4		褐	黒	外面クロクロナデ 内面横ミガキ・黒色処理
129	N39~42 W117~ 120	西流-26	須恵	杯?	11.2			1/8		暗青灰	暗青灰	内外ともクロクロナデ
130	N39~ 42W117~ 120	西流-27	須恵	杯?		9.9			1/5	暗青灰	暗青灰	内外ともクロクロナデ 底面回転ヘラケズリ 129と同一個体の可能性あり
131	N42W117 ~120	西流-23	須恵	鉢?						明灰褐	明灰褐	内外ともクロクロナデ 外面クロクロ目強い
132	N42W117 ~120	西流-24	須恵	鉢?		10.5			1/6	明灰褐	明灰褐	内外ともクロクロナデ 底面ナデ
133	N30W123 ~126	西流-25	土師	甕A		8.0			1/4	橙褐	橙褐	内外ともナデ
134	N54W114	西流-9	須恵	杯B		6.0			1/2	暗青灰	淡褐	内外ともクロクロナデ 付高台後ナデ 底面回転ヘラケズリ
135	N54W105	西流-1	須恵	杯A	11.8	5.2	3.3	1/5	一部	灰褐	灰褐	内外ともクロクロナデ 底面の調整不明
136	N54W111	西流-28	緑釉	椀	19.6	9.5	5.5	1/3	3/4	黄灰	黄灰	緑釉生地 内外ともクロクロナデ後ミガキ 底面回転ヘラケズリ 付高台後ナデ 第8次調査地点184住出土のもの 今回出土は底部1/4

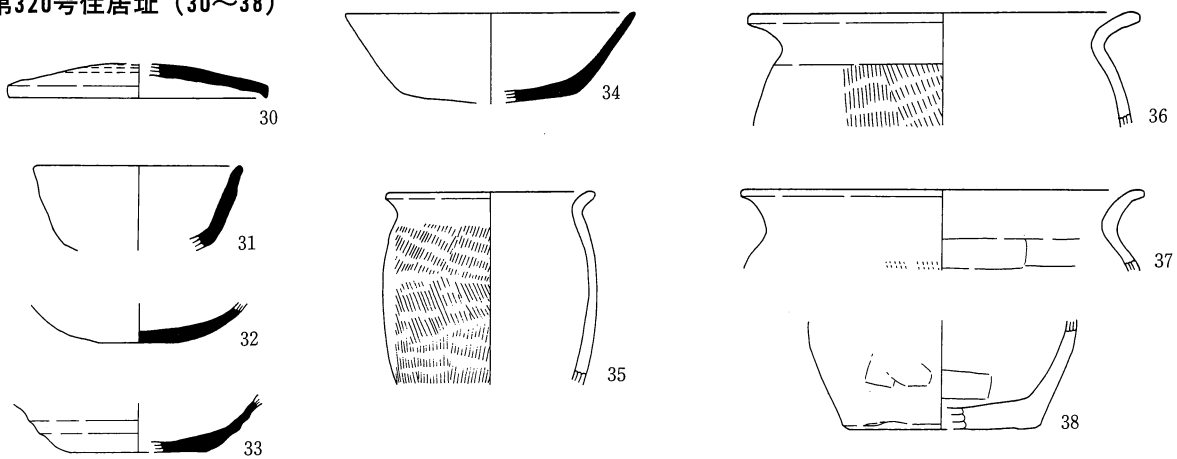
第318号住居址 (1~5)



第319号住居址 (6~29)



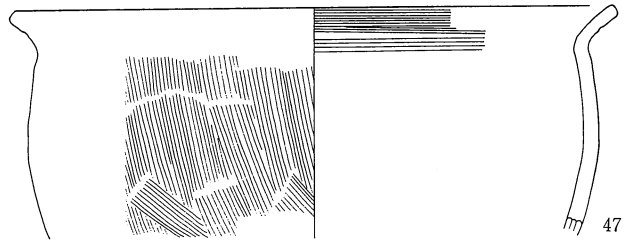
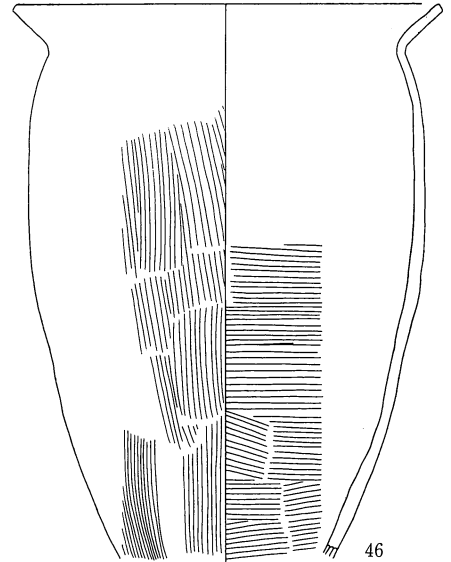
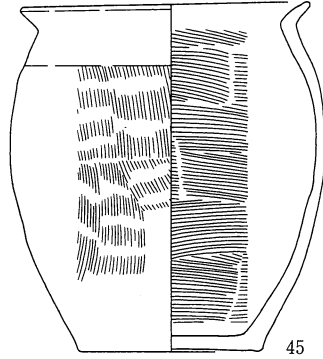
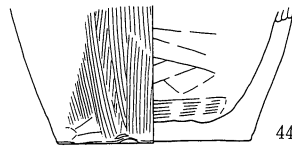
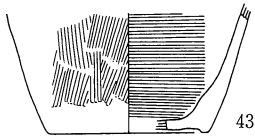
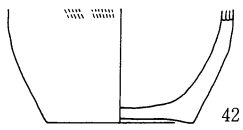
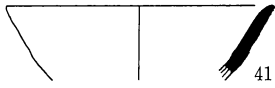
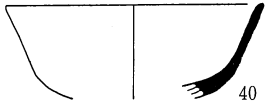
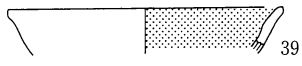
第320号住居址 (30~38)



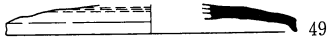
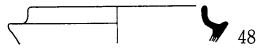
0 10cm

第13图 出土遺物(2)

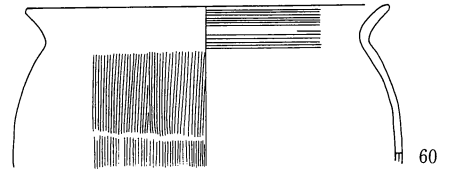
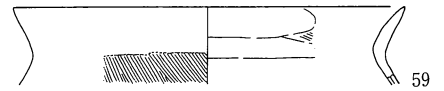
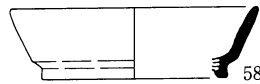
第323号住居址 (39~47)



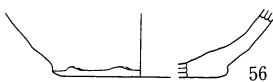
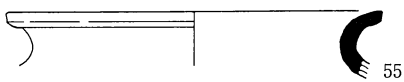
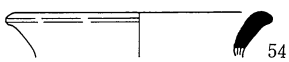
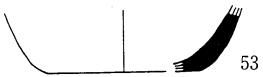
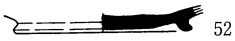
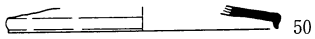
第325号住居址 (48・49)



第328号住居址 (57~60)



第326号住居址 (50~56)

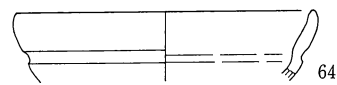


土48

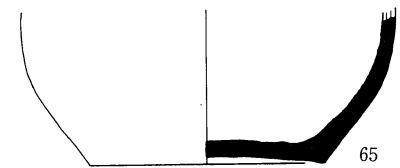
土21

332住

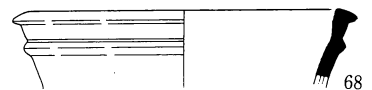
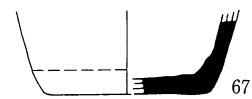
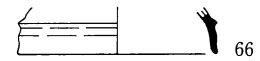
土38



土31

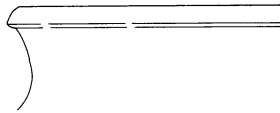
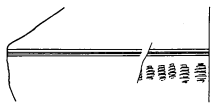
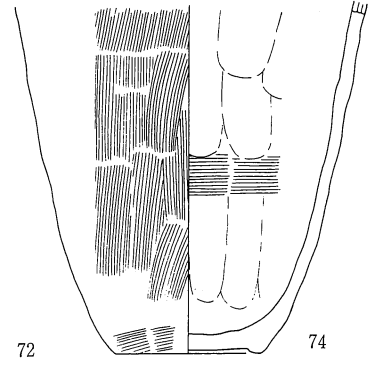
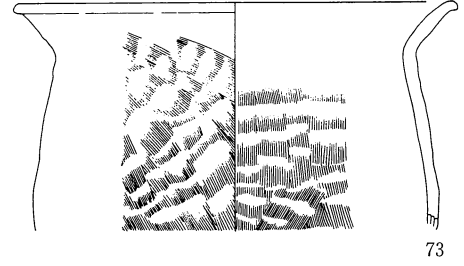
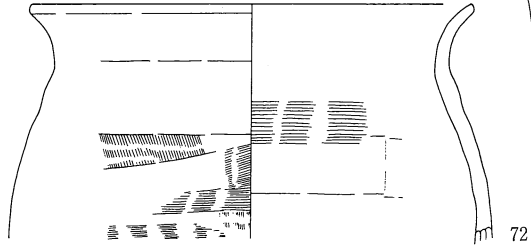
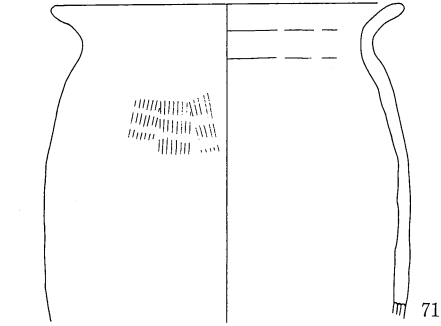
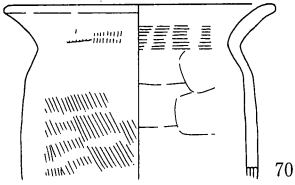
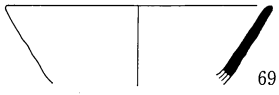


検出面 (66~68)

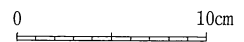
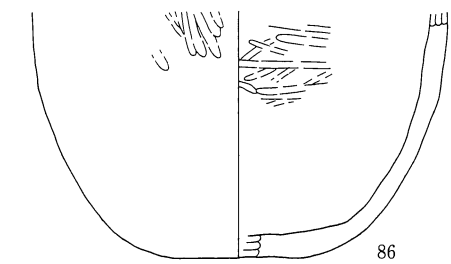
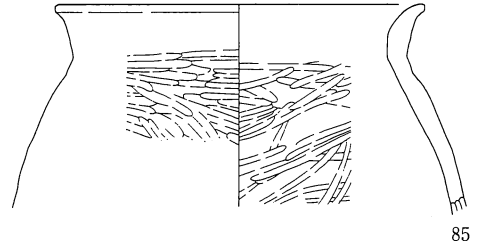
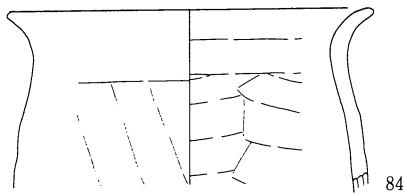
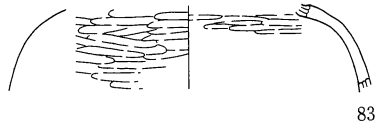
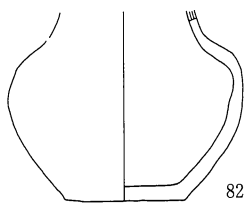
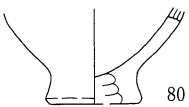
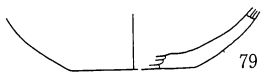
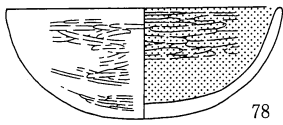


第14図 出土遺物(3)

第329号住居址 (69~76)

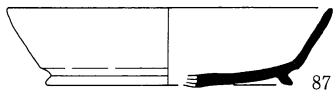


第338号住居址 (77~86)

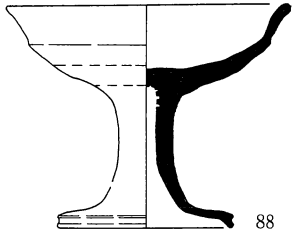


第15图 出土遺物(4)

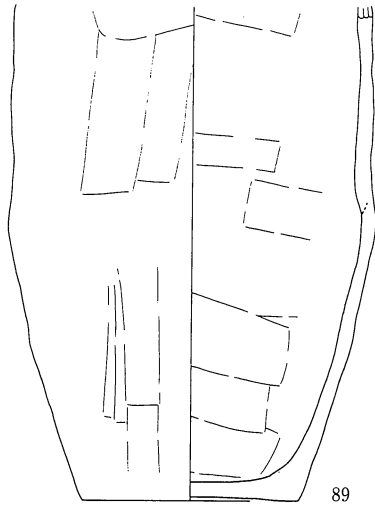
第335号住居址 (87~90)



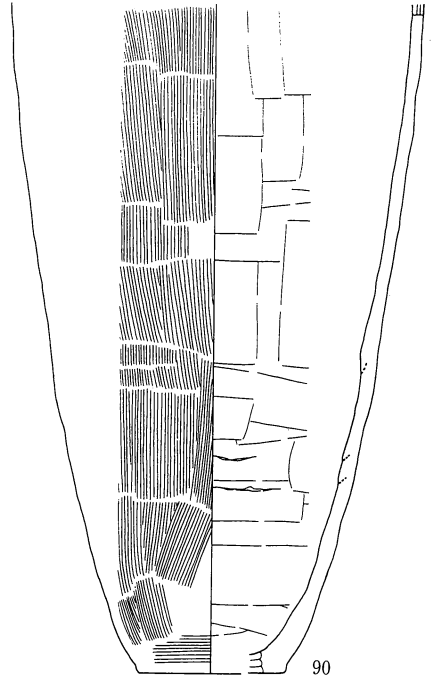
87



88



89

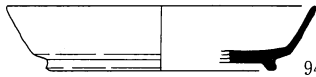


90

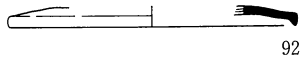
第336号住居址 (91~96)



91



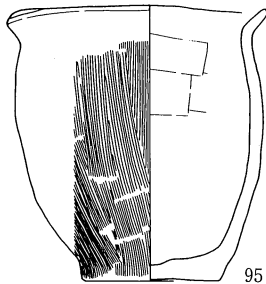
94



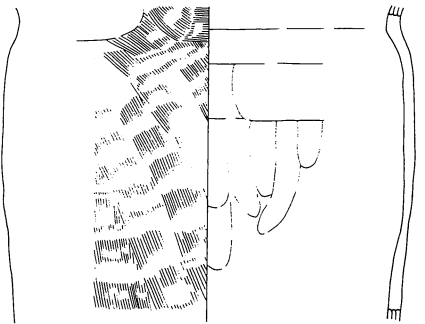
92



93

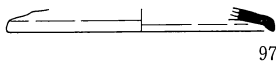


95

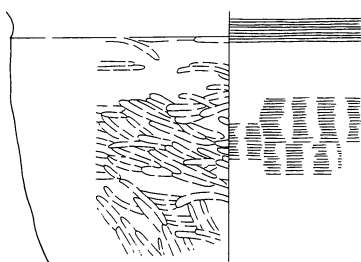


96

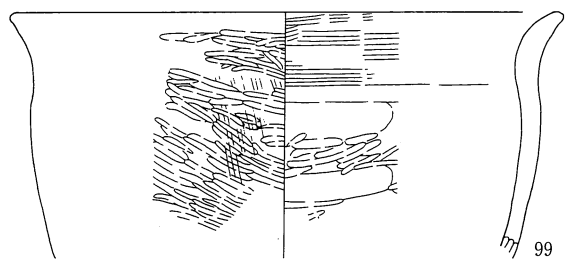
第337号住居址 (97~99)



97



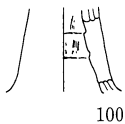
98



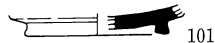
99

溝 1

西側凹地状地形 (101~105)



100



101



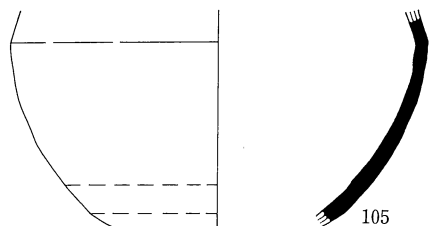
103



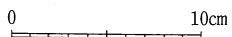
102



104

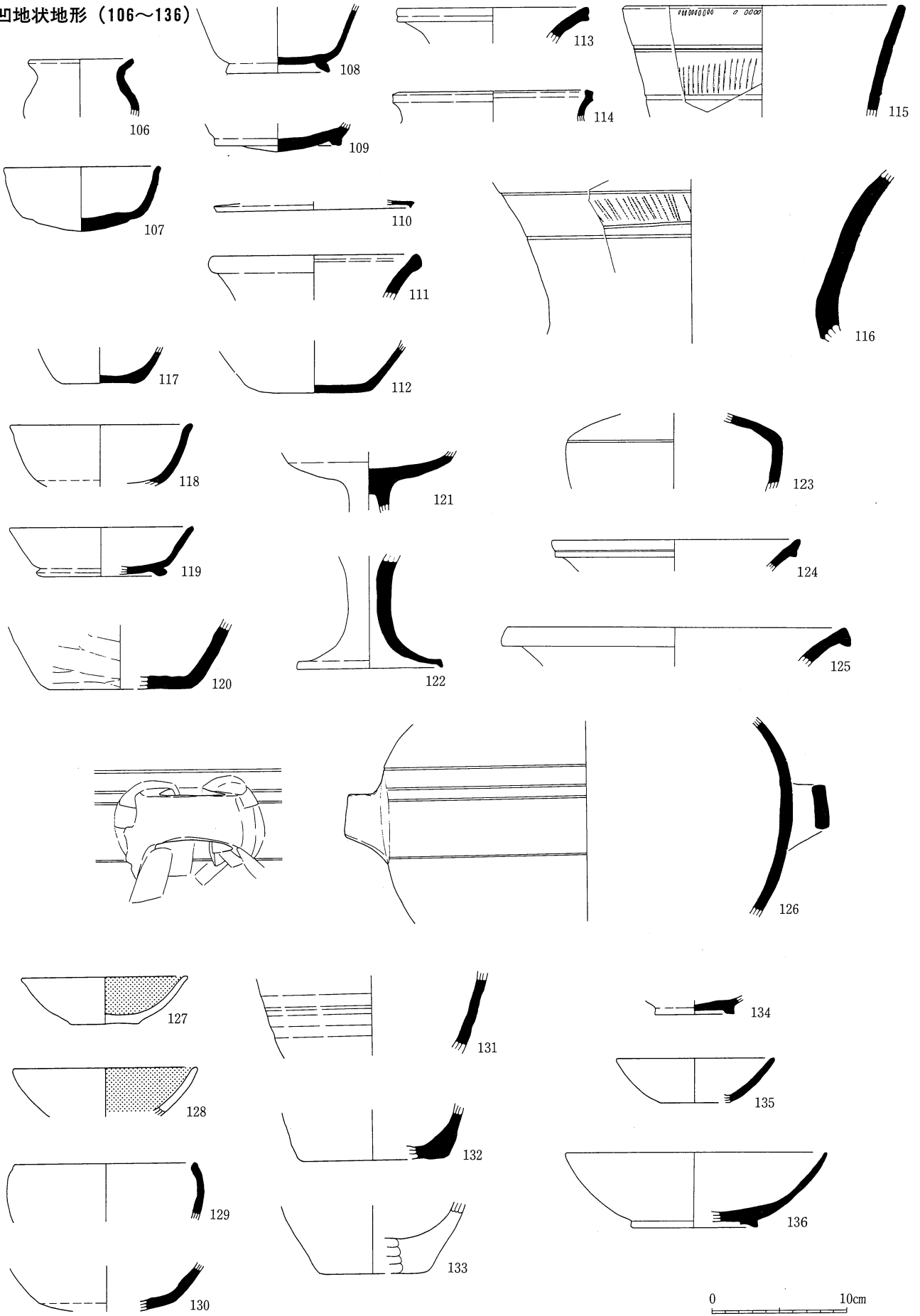


105



第16図 出土遺物(5)

西側凹地状地形 (106~136)



第17图 出土遺物(6)

VI 調査のまとめ

今回の調査地点では、古墳時代後期～平安時代前期にかけての集落域及び遺跡西側の縁辺部の状況を調査することができた。現代の攪乱により遺跡のかなりの部分が破壊を受けており、往時の状況は必ずしも明らかではないが、周辺の調査地点での成果を加え、調査成果を簡単にまとめておきたい。

(1) 集落の変遷

今回の調査によって確認できた住居址は、古墳時代後期1棟、奈良時代8棟、平安時代前期2棟、不明2棟の13棟である。時期毎の分布状況は、攪乱によってかなりの部分が破壊されていることから詳しくはわからない。全体的な傾向としては、調査区西側に古墳時代後期～古代2期までの住居址が分布し、3期以降東側（今回のA区）に分布する状況が窺える。こうした傾向は今回の調査地点の北側に隣接する第8次調査地点でも窺うことができる。なお、隣接する第8次調査地点及び第7次調査地点では古墳時代前期末～中期初頭の遺物の出土を見たが、今回の調査地点では確認されなかった。これまでのところ、この時期の明確な遺構は確認されておらず、今回の調査地点を含む出川南遺跡南西の一带に集落が展開されるのは古墳時代後期以降と考えておきたい。

古墳時代後期の住居址は第4次調査地点で多数確認されているほか、今回の調査地点の東側に位置する第II・III・V・VII・VIII・X次各調査地点で確認されており、該期集落がかなり広範囲に展開していたことが窺える。その中で今回確認された338住は該期住居址の南西端と考えることができる。

奈良時代の住居址は今回の調査で確認されたものの主体を占めるが、同時に存在していたのは多くても3軒程度と思われる。1～2期の住居址は第8次調査地点の北側でも確認されている。今回の調査地点の南側約300mの平田北遺跡でも1～2期の集落が確認されており、これが出川南遺跡の該期集落と一連のものであった可能性もある。古墳時代後期の集落が次第に南側へと展開していったかのように見える。

平安時代の住居址は2軒を確認したにとどまった。第8次調査地点では5～6期の住居址が今回のA区の北側の部分から東側に確認されている。今回の調査で確認した該期住居址は、これまでの調査成果からすればもっとも西側に位置する一群といえる。なお、今回の調査では7期以降の住居址は確認できなかったが、第8次調査地点では、今回のA区の東隣の地区で7～8期の住居址が確認されている。

(2) 遺跡縁辺部の状況と遺跡の範囲

今回の調査地点の西側では凹地状の地形を確認することができ、この一带には住居址等の遺構は確認できなかった。一带は遺跡西側の縁辺部と考えることができよう。ここでは凹地状の地形に人為的に遺物が投棄されたと思われる状況を観察することができた。平瀬遺跡では埋没途上の廃絶後の住居址内に礫を蓄えていた状況が推測されており（例言7中文献3）、今回確認された礫群も単に投棄されただけでなく、一時的な貯蔵の場として機能していた可能性も指摘できよう。出川南遺跡の西端を確認した点、及び遺跡縁辺部の一つのあり方をとらえることができた点に成果を認めることができる。今回確認できた凹地状の地形は、なお北側に続いているものと思われ、今後の調査により縁辺部の状況と集落域の関わりをより明らかにすることができるものと思われる。

最後に本調査の実施に際して多大なる御協力を頂いた長野県住宅部の皆様、並びに県営住宅南松本団地をはじめ地元関係者の皆様に感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。

写真図版

調査地区全景（西から）

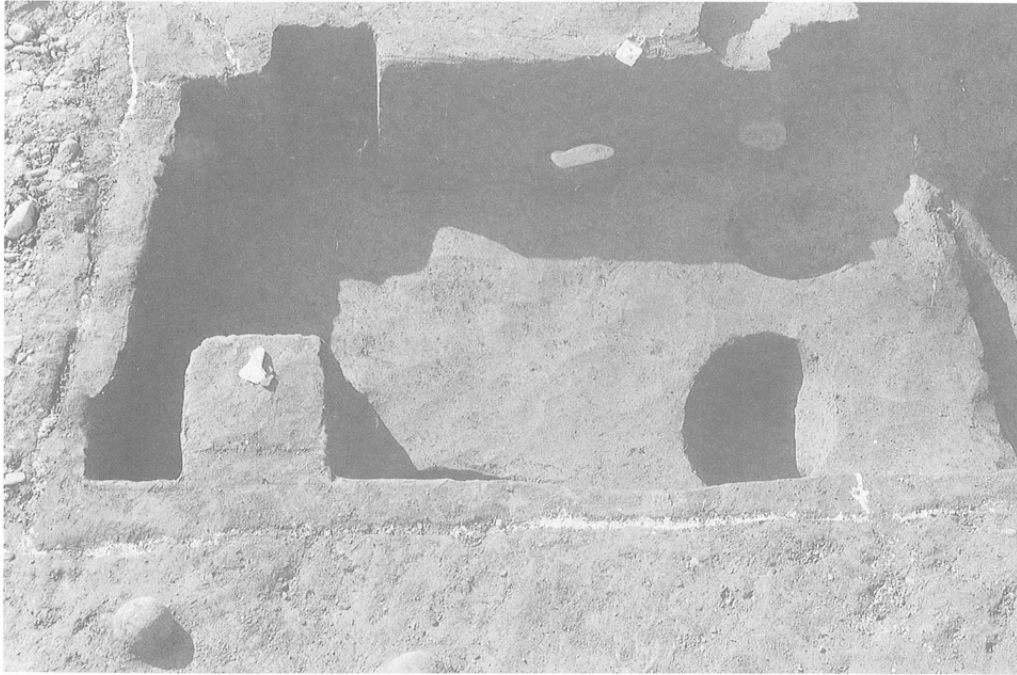


A区調査風景（西から）



B区東側（東から）





第318号住居址完掘状況
(北から)



第319号住居址完掘状況
(北から)

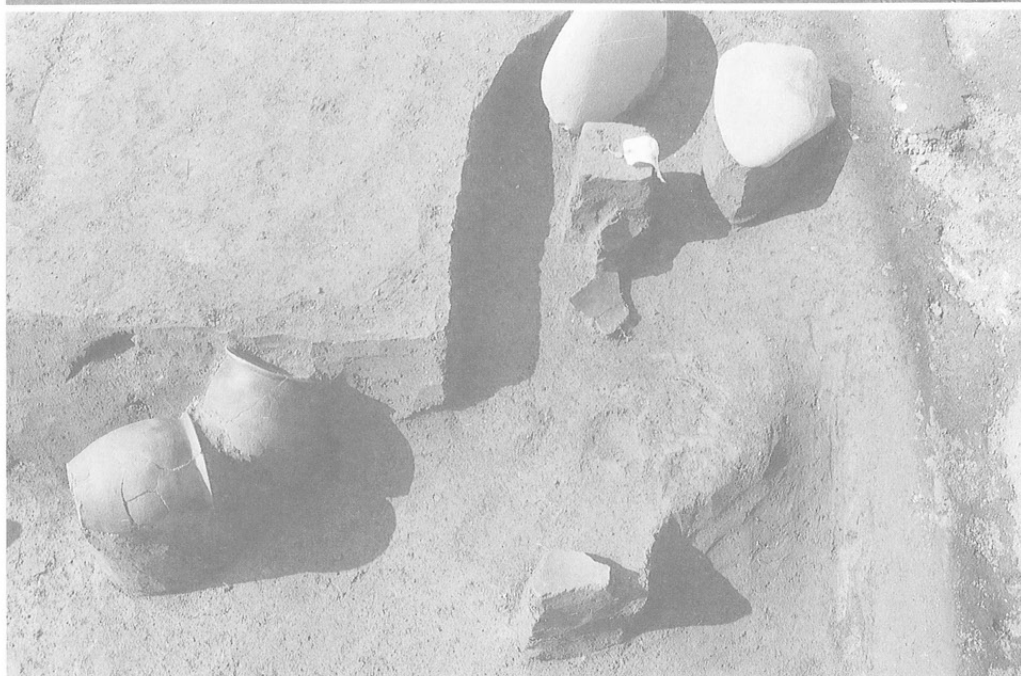


第320号住居址完掘状況
(北から)

第323号住居址完掘状況
(西から)



第323号住居址出土状況
(カマド周辺 西から)



第325号住居址完掘状況
(北から)





第328号住居址完掘状況
(北から)



第329号住居址完掘状況
(西から)



第336号住居址完掘状況
(西から)

第336号住居址出土状況
(カマド内 西から)



第337号住居址完掘状況
(西から)



第337号住居址出土状況
(北から)

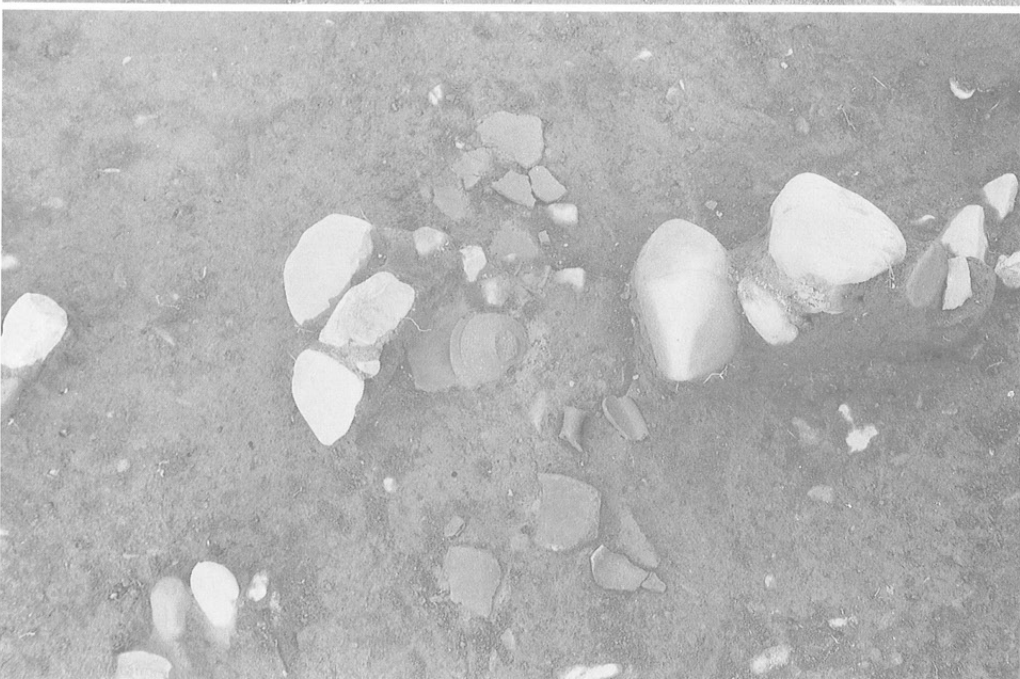




第335号住居址完掘状況
(西から)



第335号住居址出土状況
(北から)



第335号住居址出土状況
(北から)

第338号住居址完掘状況
(東から)



第338号住居址出土状況
(カマド周辺 東から)



第338号住居址煙道
(東から)





礫集中出土地点1
(西から)



礫集中出土地点2
(西から)



土層堆積状況
(A-A' 断面)

出川南遺跡XII緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしいでがわみなみいせき12きんきゅうはくつちようさほうこくしょ							
書名	長野県松本市出川南遺跡XII緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.158							
編著者名	菊池直哉・田多井用章							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 (記録・資料保管：松本市立考古博物館・〒390-0823 松本市中山3738-1・TEL0263-86-4710)							
発行年月日	平成14年(2002)年3月25日 (平成13年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いでがわみなみ 出川南	ながのけん 長野県 まつもとしい 松本市 よし芳野	20202	177	36度 12分 12秒	137度 58分 02秒	20011015～ 20020116	2,197	県営住宅南松本団地建 替事業に伴う緊急発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
出川南	集落址	古墳～平安	竪穴住居址 溝 土坑 ピット	13棟 1条 34基 70基	土器・陶器 (土師器・須恵器・灰釉陶器・ 緑釉陶器) 鉄器		古墳時代後期から平安時 代前期の集落址を確認し た。	

松本市文化財調査報告 No.158

長野県松本市

出川南遺跡XII

— 緊急発掘調査報告書 —

発行日 平成14年3月25日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 アサカワ印刷株式会社

